

V. 2019年度 道北の地域振興を考える研究会 セミナー

- (1) 冒頭挨拶 清水池 義治（道北の地域振興を考える研究会 会長）
- (2) 第1報告 浅川 晃広（きた北海道移住支援型シェアハウス・キックスタート！代表 /
名古屋大学大学院国際開発研究科・講師）
人の国際移動から見た国内移住
- (3) 第2報告 菅原 英人（元・天塩町地域おこし協力隊）
代替不能な地域固有資源に起因する移住事例
- (4) 第3報告 中島 まなみ（沖ヨガインストラクター）
豊富温泉が与えてくれた第2の人生～地域に役立つ隙間を見つける柔軟な発想～
- (5) 総合討論
- (6) 国道40号音威子府バイパス工事現場見学報告

期 日 2019年10月20日（日）

場 所 きた北海道移住支援型シェアハウス・キックスタート！

主 催 道北の地域振興を考える研究会（会長：清水池 義治）

共 催 名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター（センター長：結城 佳子）

（1）冒頭挨拶

司会：清水池 義治（道北の地域振興を考える研究会会長、北海道大学大学院農学研究院 講師）

皆さん、こんにちは。ただ今より 2019 年度、道北の地域振興を考える研究会セミナーを開始したいと思います。本日は、日曜日にもかかわらず、たくさんの方にお越しいただき、誠にありがとうございます。

最初に、簡単に主催団体である研究会のことについて少しお話しさせていただきます。この道北の地域振興を考える研究会は 1997 年に設立され、上川北部を中心に、この地域をフィールドにしている大学の研究者や地元の住民、公務員、団体職員の方々によって構成されている研究会です。研究会で取り上げる内容は、実に多岐に亘っておりまして、道北地域に関わるありとあらゆる課題を取り上げて活動してきてます。本研究会の公式ホームページには、過去どのような活動をしてきたかを掲載していますし、毎年発行している研究会誌「北海道北部の地域振興」の直近 2 年分に関してはネット上で PDF で見ることができます。こういった講演会とか、セミナーの内容を掲載しておりますので、ご覧いただければと思います。5 年前ぐらい前から稚内北星学園大学の先生たちにも加わっていただき、宗谷地域の会員も増え、名実共に道北地域の研究会になっているということです。

私自身のことを言っておりませんでしたが、私は 2 年前から会長をしております、北海道大学の清

水池と申します。3年前まで名寄市立大学において、そのときからこの研究会に関わっています。現在でも名寄市立大学がこの研究会の事務局を務めています。会の活動としては、例年3月に講演会、大体これぐらいの時期にセミナーを開催していまして、椎内では4年ぶりぐらいのセミナーとなります。

本日は、北海道北部地域における移住の今と未来と題してセミナーを開催いたします。移住に関しては、各地域で人口減少が起きている中で、移住が非常に注目され、国、あるいは自治体レベルでさまざまな取り組みが行われているところです。この道北地域を見てみると、移住者の方がある程度の集団でいる地域というのが幾つか挙げられると思います。例えば、上川地域でいうと下川町ですね。そして、北のほうの地域だったら、豊富町などでたくさんの移住者の方が既にいらっしゃいます。今回は、3名の方にお話ししていただきますけども、全員が移住者、半移住者の方も含めてですけれども、移住者ということで、この宗谷地域にどのような方が、どういう思いで移住されていて、実際に地域でどのように活動されているか、今後そういう移住をさらに進めていくうえで一体どういったことが課題になるのか、そういう中で見えてくるこの地域の魅力とは何かなど、そういったことについてお話ししていただければと思います。

本日の流れですが、本日の会場でありますキックスタート！代表の浅川先生、天塩町の菅原さん、豊富町の中島さんからそれぞれ30分ずつお話をさせていただきます。その後、30分間の休憩ですが、その際にこの施設の見学を予定しています。今日、この施設に来ること自体も含めて、私は非常に楽しみにしておりまして、どういう施設か非常に関心があります。休憩後、残り1時間程度でディスカッションで、皆さまで議論をできればと考えています。

今回の研究会のセミナーは、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターとの共催です。また、このセミナーの開催に当たりましては、北海道開発技術センター、北海道河川財団、石狩川振興財団のご支援をいただいていることをお知らせいたしまして、お礼を申し上げたいと思います。

それでは、ちょっと若干前置きが長くなりましたが、早速セミナーの中身に入っていきたいと思います。では、最初に、キックスタート！代表、そして名古屋大学大学院国際開発研究科講師の浅川晃広さんが人の国際移動から見た国内移住という形でお話していただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

(2) 第1報告 人の国際移動から見た国内移住
浅川 晃広（きた北海道移住支援型シェアハウス・キックスタート！
代表 / 名古屋大学大学院国際開発研究科 講師）

皆さん、こんにちは。先ほどご紹介にあずかりました、浅川でございます。本当に今日は、キックスタート！にこれだけたくさんの方々がお越しいただいて本当にうれしく思います。ここでのキックスタート！ですが、きた北海道移住支援型シェアハウスと名付けておりまして、移住支援型ということで移住希望者が取りあえず来ていただき、こちらで生活しながら移住について考えていくという施設としてつくりました。たまたまこの物件を買い取って、ここで昔、澤商店というところで、ここにこういう店舗スペースがありましたので、これはいいと思って、ここをセミナールームにしようと思ってこういうふうにつくってみました。

長机と椅子は買ったのですが、単なる宿泊部分だけじゃなくて、こういう今日のようないろんなイベントとかセミナーとか会合を実施して、地域の交流拠点というか、そういう思いを持って作りました。清水池先生のほうから、ぜひちょっとここを移住ということでやってみないかというお声掛けいただきまして、今日があるわけでございまして、これだけここには多数の皆さま方にお集まりいただきまして本当にありがとうございます。

あとのお二人、菅原さんとまなみんさんのほうは、ご自身の事例についてたっぷりと語っていただく予定ですので、私のほうからは、もっと総論的な話のほうをさせていただきたいと思います。

今日、「人の国際移動から見た国内移住」ということでタイトルを付けてみたんですけども、私の専門というのが、ちょっと去年から話題になっていますが、入管法です。入管法とはどういう法律かというと、外国人の出入国、在留を規制する、管理する、そういう法律です。人の国際移動というのを20年ぐらいずっと研究してきて、入管法というのはまさに、人の国際移動をするときに、日本に来た外国人が規制されますし、またわれわれが外に行く際、また外国人としてその国の入管法で規制されるということで、そういうことをずっと見てきました。

今日のテーマがまさに国内移住ということですし、私も実は、先ほど半移住者という言葉がありましたけども、今二地域居住とか、二拠点居住とか、デュアルライフとか、いろんな言い方があるんですけども、二つのところに拠点を持って行ったり来たりするということで、私は本業というか、こっちのほうが最近副業になっているんじゃないかなと思うんですけど、名古屋の大学のほうで一応本業がありまして、稚内のほうに月1回ぐらい来て大体1週間から10日ぐらい滞在して、行ったり来たりしていまして、そういうことで半移住者という言い方もできますし、二地域居住者とか、二拠点居住者とか、デュアルライフということで、デュアラーという言い方も最近あるそうですね。

ということで、名古屋と稚内を行ったり来たりしているんですけども、そういうことも含めまして、僕の専門の国際的な人の移動と見た場合と比較して国内移住というのはどういうことがいえるんだろうかというのを、話題提供させていただきたいと思います。

自己紹介ということですが、この中に私のことをご存じの方かなり多いのですけれども、先ほど申し上げたとおり 2017 年 9 月から二地域居住をここ稚内と名古屋で始めまして、酪農地帯って書いてますけど、下勇知つていうところご存じですかね。オロロンラインの「こうほねの家」のもうちょっと入ったところ、たまたまそこに空き家があって、そこで 2 年ぐらい前からちょうど二地域居住を開始しまして、ちょっといろんな偶然が重なって、今年 3 月にシェアハウスをやろうということを決めて、ここを買うと決めて、それで改修作業をいろいろ進めて、おかげさまで今年 8 月にオープンできました。

私もまさかこれをやるとは思ってなかったんですけども、このときにいろんな偶然が重なりました。先ほど申し上げたとおり、ずっと稚内にいませんので、ここをやる前提として、やっぱり常駐の管理人が必要だということで、実はそこにいらっしゃいます、大阪からの移住者である村木さんと、先ほど見ていただいた動画を前から一緒につくっていました、どうですかと聞きすると、「やります」ということを言っていただいたので、「やるか」ということで。村木さんは、今こちらの 1 階部分に住んでいただいて、今、日本最北端の便利屋として起業をされていて、便利屋の仕事の傍らこのキックスタート！の管理もやっていただいているということです。

私の専門は、先ほど申し上げたとおり入管法とか移民法で、こういう本がありまして、もし今日懇親会参加される方がいましたら、2 階のほうに本棚を置いていまして、その本棚の中に私の本全部置いてますので、もしよかつたら、手に取っていただければと思います。

私、世界で一番稚内が好きとよく言っています、海外に行った国、数えてみたら、20 カ国あります、特にオーストラリアで合計 3 年住みました。日本も沖縄を除いてほとんど行きましたし、北海道もほぼ全て行ったんですけども、その中でも稚内、道北が一番好きだという結論に至ったということです。この話すると、たまに、何だこいつは、頭大丈夫か、と言われたりするんですけど、いや、頭は全然大丈夫ですので。

ここまでがオフィシャル版なのですが、ちょっとパーソナル版の自己紹介ということであえて出してみました。先ほどしゃべったとおりなんですけれども、好きな食べ物ということで、本当にこちらの気候も自然も素晴らしいで、本当に食べ物もおいしくて毎日楽しんでいまして、サッポロクラシックとか。今日の懇親会でももちろん用意しておりますので。ジンギスカンは用意してないんですけど、ホタテとか、あと音威子府そばとか、アスパラガスとか、今はジャガイモとかカボチャとか売っていますけど、本当に北海道では、魚介類、農作物といった食が豊かで、私も毎日おいしいもの食べています。こんな感じです。写真撮影、括弧スマホってあえて書いてあるんですけども、やっぱりこっちは本当に自然が美しいので、私も触発されて一眼レフのカメラを買って美しい景色撮りたいなと思ったのですが、もう全然駄目で墜落して速攻で売ってしまいました。写真はスマホでちまちまやっているということです。

ということで、国際移動と国内移動の違いというふうに入っていくたいと思います。国際的な人の移動と国内的な人の移動って何が違うんだろうということです。決定的な違いとしては、国内移動という場合に、例えば名古屋から稚内に来るというのに、何かに制限されるということはないんですね。もちろん飛行機で来るのかとか、バスで来るのかとか、鉄道で来るのかとか、車

で来るんだとか、バイクで来るんだか、チャリで來るのか、何でもいいんですけども、手段は何でもいいんですけども、誰かに制限されるとか、誰かの許可を取らないという、そういう性格のものでは決してないです。

お金が足りないんだったら、頑張ってバスで來るか、お金があるんだったら、飛行機で來てもいいですよという、そういう経済的な意味での制限はあるんですけども、そもそも誰かの許可を得なければならぬという制限はありません。ところが、国際移動ですが、この中に海外旅行とか行かれた方はほぼ多いと思うんですけども、必ず国境、出入国管理の制約があるということで、われわれ日本人が外国に行く場合は、その外国の政府からの入国の許可を得なければ、その外国には入国できない。

これはまったく逆も一緒で、外国人が日本に來るために、日本政府の許可を得なければ入国、在留できない。その許可を失った人たちを不法滞在者とか言い方をしています。国際的な人の移動だと、目的国の政府から許可を得なければならぬ。その許可というのが一般にビザといわれるもので、そういう決定的な違いがあるわけです。これは、法的な面です。

そういうことを念頭に国際的な人の移動の二つの選別というのがありますて、それは国家による選別ですね。コストによる選別ということで、国家による選別は、先ほど申し上げたとおり、例えば僕がアメリカに行くにはアメリカ政府の許可を得なければならぬ。最近では、エスタとかっていうオンラインでできるものがあるみたいですけれど、アメリカ行ったことないので、分からぬですが。

例えば国家によって移動が制約されるというのは、具体例はどういうことかというと、アメリカに行く航空券が20万円掛かりますと。もっと安いかもしれません。これは一つの例として。これが買えるけど、ビザが取れないから行けない。アメリカ政府からの入国許可が得られないので、アメリカに行くことができない。20万円という航空券を買える経済的能力はあるけれども、アメリカ政府によって制限されてしまう。

それ以前にコストによる選別というのがありますて、アメリカに行く航空券が20万円掛かる。ところが、これが買えないから行けないということなので、アメリカ政府の許可を得るとか、得ないとかの前に、そもそもアメリカに行く航空券買えませんよ。そういう経済能力がありませんよということだと、そもそもコストが掛かるから行けないということで、もう移動自体が制限されてしまう。そのコストによる選別によって移動ができない場合、国家による選別以前に移動が制限されるということです。

このため、この観点から見ると、なぜ外国人観光客これだけ増えたのかというと、もう分かると思うんですけども、LCCなどの発達によってコストが低下したから、これまで航空券が高くて日本に來ることができなかつた、コスト的な意味で移動できなかつた外国の人たちが、LCCでものすごく安くなり、だったら、海外行ってみようかということになります。これは日本人もそうかもしれませんね。大学生とか、お金のない学生が海外旅行って、なかなか行けなかつたのですが、しかし、LCCで安く行けるようになった。だから、海外旅行行こうかということで、コストが下がれば下がるほど移動できる能力が高まるということです。訪日外国人がこれだけ増

えてる背景の一つはLCCの発達ということで、このコストによる選別の部分、機能というか、そこが弱くなつたということです。

一方、国内移動の場合は、国家による選別はありません。コストによる選別のみが残るわけで、そうすると国内よりはコスト面、経済面での制約が残る。これは克服可能です。これは、どういうことかというと、法的なというか、国際移動の場合の法的な意味の制約というのを克服がかなり難しく、自分の努力ではどうしようもない部分があります。これは日本の入管法上の在留資格といわれるものですけれど、こういう形で合計29種類あります。ここにちょっと小さく特定技能と書いていますけど、これが去年の秋のちょうど今ごろですかね、法改正でかなりぐだぐだ、ぐだぐだと議論やって、今年の4月から入管法を改正して特定技能を作りました。こういう29種類もの在留資格があります。外国人は、これら29種類の内のどれか一つに該当する必要があり、仮に何も要件に該当しないと日本で在留を認められません。いくら1億円持っている、例えば10億円持っている、日本政府の国債10億円買うから、在留認めて、と言っても駄目なんですね。ないです。入管法上これしか外国人が日本で在留を認める根拠がないのです。

100億円ぐらい日本の国債買ってくれば、永住権あげますとか、つくってもいいんですけども、今のところないので、いくらお金があったとしても、国際的な人の移動の場合、仮に日本に外国人が来る場合というのは、日本政府が入管法で定めるこういう要件に合致しないと、日本に合法的に在留することはできないという、結構すごい制約があるんですね。それでも外国人が、稚内でも技能実習生いますし、あと稚内北星学園大のネパール人ですかね。留学でいます。それも既存の入管法の在留資格に合致しているから、合法的に日本にいるということで、これはもうその国の法律、入管法とか移民法によるので、もう個人の努力ではちょっとどうしようもできないところがあります。これが国際的な人の移動の制約ということです。

これが法的な面ですけれども、では、もうちょっと実質的な面ということを考えてみた場合に、まず言語です。国内では同一。日本の日本語が事実上、公用語ですから、同一なんですけれども、国際的な移動だと、基本的には違いますよね。日本語というのは、たぶん日本でしか通用しないので、われわれが海外に行くとその国の外国語ができないと、いくらこちらで高い技術持っていても、その国の言語できないと駄目ですね。学歴ですが、国内は同一なんですが、われわれが外に出て行くときでもいいですし、外国人が日本に来るときでもいいんですが、ここに劣化って書いてあります。日本でしたら、何とか大学っていった場合に、大体その大学がどの程度の位置付けかってよく分かるんですけれども、ところが、海外に行くと、たぶんトウキョウユニバーシティ（東京大学）ぐらいしか、キョウトユニバーシティ（京都大学）ぐらいしか知らないんじゃないのか思います。そうすると、日本の中では東大、京大以外でもレベルの高い大学、学歴を持っていた人も、海外だと結局世界的に超一流じゃないと認知されないとということで、それはもう日本にやって来る留学生、私がいるところも留学生はかなり多いんですけども、一緒に分からぬよ、海外の大学のこの大学がどれくらいの位置付けなのかというのが分からぬので。ですので、この学歴という場合も外国に行くと基本的には劣化してしまう。日本ほど意味は持たなくなってしまう。

資格ですが、国内は当然同一で、別に名古屋で、愛知県で運転免許、別に北海道で使えないとか絶対あり得ないので、どの地方でも同一です。ところが、これ海外に行った場合は、限定って書いてありますが、認証制度があるもののみ移転可能でして、基本的に移転が難しいということです。運転免許みたいに共通性が高い部分では、国によっては書き換えが可能かと。

台湾の免許は日本の免許に書き換えできるらしいのですが、ただそういう資格を持っていても、海外に行くとそういう書き換えというか、認証制度があるのであればいいのですが、そうではないと資格も紙くずになってしまふという可能性があります。そうすると、国際移動について何がいえるかというと、スキルの劣化が激しいということなのです。このため、一部経産省というところが主導をして、高度外国人材を入れようということで、あれまったくもって的外れで、こういうことが基本分かってないのか、分かっていてやっているのか分からぬのですが。

日本から日本人が出て行く場合でも、日本に外国人が入っていく場合でも同じなのですが、外国では高度人材であったとしても、日本語ができない段階で相当厳しいと思います。こういういろんな言語とか、壁によってスキルの劣化が起こるのですね。そうすると、本国では社会経済的地位が高かったものの、移住国に来ると社会経済的地位が低下するということが往々にして起こります。

このため、ちょっと話がずれるのですが、さきほどの特定技能もありましたけど、外国人からするとむしろこういう学歴のある人のほうが劣化して、どちらかというと、単純労働、肉体労働をやる人のほうは劣化しない。同じことですから、体動かしたらいい。そういう外国人の場合、本国で同じ肉体労働をやると、日本で肉体労働をやると賃金格差、為替格差があるので、日本でやるとはるかに儲かるのです。だから、そういうスキルの劣化がしない肉体労働であれば、それはむしろ移転可能なのですが、むしろ高度な言語とか学歴とか資格とか持っている人のほうが移動しにくいという、ちょっと逆説的なことが実は起こっています。

まとめますと、出入国管理、国内は当然なしです。国際的にはあります。費用は、外国に行くよりは安いでしょう。国際的な移動をすると、高いだろうということです。スキルは同一、大幅に劣化ということなんですかとも、ただ例外があつて、英語圏はそうとはいえなくて、オーストラリアでもイギリスからの移民は結構多いのですね。それはなぜかというと、やっぱり英語だからということです。ですので、英語圏の場合、英語を公用語とする国は結構ありますよね。アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス。あと英語をそもそも第2言語として学んでいる人の数は、莫大な人数がいるわけです、世界に。ですので、オーストラリアとかは技術移民という形で、英語ができるスキルを持ってる移民を受け入れることができるのですが、日本の場合、日本語の限定があるとかなり難しいという、基本的なことをたぶん経産省はちょっと分かっているのか、分かってないのか、分からぬのでしょうか。

日本の場合は、こういう日本語という制約があるので、高度な外国人、高度なスキルを持った外国人については英語圏と比較すれば、はるかに難しいということをまず分かっておかないと、とんちんかんな話になつてしまふということです。いずれにしても、国内移動の場合は、ここですね。スキルは劣化しません。国際移動になると、大幅に劣化する可能性がありますが、国内移

動の場合スキルは同一、基本的には同一だということです。

という総論的な話から、道北においてはどう考えればいいんだろうかということですけれども、実はちょっとこのシェアハウスのアイデアを思い浮かんだ前提としては、天塩町の菅原さんとの出会いがあります。菅原さんに初めて2月にお会いして、その後いろいろと意見交換をさせていただいて、何となくこの道北への移住というのが菅原さんとか、ほかの方と意見交換させていただいて見えてきたものがありました。そのときにたまたま読んだ本が、この『ルワンダ中央銀行総裁日記』という本でして、それで著者の服部さんという方がアフリカのルワンダという国の中銀の総裁として赴任していろんな経済改革を行ったということです。服部さんはお亡くなりになられるのですけども、それでも増刷されるというすごい本で、ちょっと私もそれ目指したいです。

その中でこの著者がどういうふうにおっしゃっていたかというと、「途上国の発展を阻む最大の障害は人の問題であるが、その発展の要素もまた人なのである」ということで、要は人なんだというふうに言い切って、なるほどと思いました。この道北地域を考えた際、まさに人なんだというふうに考えたわけです。これは、この地域の人にはあまりしつこくやらなくていいと思うんですが、やはり教育上のインフラがすごく脆弱で、いま稚内北星学園大はご存じのとおり厳しい状況になっていますが、やはり高卒の若者が域外の大学とか専門学校に進学せざるを得ない。例えば大学生がたくさんないので、家庭教師のバイトとかもいなくて、安価に学習できるインフラがないということで、やっぱり教育上のアウトカムが低いというと、失礼なのかもしれませんけれども、事実であろうということです。

そのハードなインフラということでは、確かにこれから課題も多いんですけども、私の好きな道道106号線も、交通量からすると結構すごいインフラというか、そういうハードなインフラは、本当にここら辺はそれこそ人口1人当たりとかに直せばすごいんだと思うのですが、人的資源のインフラというのがやはり脆弱なんじゃないのか、というふうに私は考えています。

医師不足、医療過疎というのは、私が改めて申し上げることでもないかと思うのですが、ここを売っていただいた澤さんも札幌にお住まいだそうです。これも聞いた話ですけれども、高齢者の方がここら辺の医療が脆弱なので、やっぱり札幌とかに親戚を頼って移ってしまうそうです。人的資源が脆弱だというのは、私自身も住んでみて分かりましたが、スライドにはしょってしまったのですが、ほかの部分、すなわち物質的なところ。これは本当に私はこっちに住んでびっくりしたのですが、ほとんど都会と遜色ない、ということです。稚内の場合だと、あちらに行くとホーマックだのシティーだの、ああいう巨大なホームセンターとかスーパーとかがあって、あとそこで買えないものもAmazonで私は何回も買いました。最初は本当に下勇知まで持ってきてくれるのかなと思っていたのですが、余裕でヤマトさんが持ってきてくれるので、全然困らない、物質的に、というのが本当に私の住んだ印象です。物質的には、この地では困らないですが、足りてないのが人的資源だろうと。

では人的資源が脆弱なこの地域で移住者が活躍できる余地とは、どういうところなんだろうと私なりにちょっと考えてみました。面白い記事が最近あります『日刊宗谷』の今年の9月22日

の記事で、「有効求人倍率過去最高、7月のハローワーク稚内管内人手不足が深刻」ということです。稚内の管内の求人倍率が全体で1.59倍。比較のために全国を見てみると、1.59倍で全国と一緒にです。北海道は1.23倍。なるほど、北海道全体よりも稚内の雇用情勢のほうがいいのだといえるのですが、職種別に見てみると、やっぱり平均値としては1.59倍なのですが、職種別に見てみるとすごい偏りがありまして、事務職が0.27倍ということで、あまり事務職がないんですね。軽作業は0.54倍です、一方専門技術、建築、土木、測量技術者、看護師、保健師は5.47倍ということで、このため、平均すると1.59倍で全国平均と一緒にで、北海道全体よりも高いということなのですが、職種別で見るとかなり偏りがあり、たぶんここにいる皆さんには印象的に感じてらっしゃることだと思いました。しかし、先ほどちょっと村木さんと話したときも、電気関係の人たちはかなり高齢化しています。村木さんが一番若いと言っていました。電気の配線屋さんとか、配管屋さんとかという、そういう手に職系の人たちが本当少なくて高齢化も進んでいると、私も聞いています。このため、人手不足といったときに、どこに人手不足があるのは、かなり偏っているといえるわけです。私の総論的な話は、一応これぐらいで終わりたいと思います。

私自身が2年間住んで考えたことなんんですけど、「同じもの」は、先ほど申し上げたとおり、物質的なところですね。全然都会と遜色ないということです。これは、私自身ちょっとびっくりしました。本当に何か不便があるのかなと思ったんですけれども、これほどまで物質に困らないのかと思いました。「あるもの」というふうに書いていますが、何が都会ではなくて、こっちにあるのかというと、そこももうそんな感じで広がっていますが、こういう大自然ですね、何といつても。私がやっぱりこちらの、低人口密度と書いてあるんですけれども、これで本当に癒やされまし、これは「こうほねの家」から見た利尻島で、ちょうど夕日が沈むときですが、こういう景色が当たり前のように毎日見れるということなのですが、都会では絶対にあり得ない。あとやっぱり都市の規模が小さいので、友だち2人誰かいたら、共通の知り合いがいるとかってよく起きるという形で、濃密な人間関係があるというような、そういうここにしかない、いいものがあります。

「ないもの」というのは、先ほど言った人的資源で、都会で当たり前のさまざまなスキルを持った人々、たぶん教育関係もそうですが、都會でしたら、河合塾でも何でもいいんですけど、そういう民間の塾があり、私も母親が中学生のときから個人のやっている英語塾に通わせてくれましたけど、まずそういう人がいないですね。医師というのも及ばずながら、介護も最近かなり人手不足ですし、先ほど言った手に職系ですよね。

都會では当たり前のようなスキルを持っていて、かつこういう自然というものに価値を見いだすようになれば、そういう人であれば、こちらに移住してきたときの移住の効用、効果というか、プラス面は大きいのではないのかなと思っています。全体のフレームワークを考えた場合に、個別に考えていくとどういうことなのかというと、都市で持っているようなスキルをいかにこの地域にうまく移転できるのかということで、これは次のお二人のほうからお話しitただくことかと思います。

今日申し上げたように、国内移動はたぶん国際移動と比較しても劣化の度合いが少ない。言語

や資格等ということで、国際的な人の移動もそうですし、国内的な人の移動もそうですけれども、結局移動をすることによって、何かプラスを得たいわけですよね。こちらのプラスというものがさっき言った大自然とか、ゆったりしたところだとかという、人口密度が低いということなのですから、プラスを得るためにこちらで足りてないスキルを都会で持った人を、どうそれをうまくこの地域に合わせるために移転することができるのか。たぶん自動的に移転というのは無理だと思うので、やっぱりこちらで何が足りてないのかというのをうまく見付け出して、自分の持っているスキルの質をカスタマイズしていくとか、そういうことが必要かもしれません。それはたぶん個別にうまくやっていくしかないというふうに思っています。

スキル移転とか、適合に成功する人材は一例なので、ほかにもあると思うのですが、この地域が受け入れることで、そういうこちらに足りてない人的資源ですね。都会からこの地域を受け入れることによって、地域全体の人的資源が増加して、それによって自然が豊かで文化的にも豊かな社会・地域になる可能性を秘めているんじゃないのかなと、思っています。ここをつくって、そういうまさに人的資源を少しでも増やしたいなと、もっと平べったく言うと、「面白い人をもつと稚内に招こうよ」という、そういう思いでやっています。

どうしても地方への移住を、特に行政の文脈なんかで見ていくと、人口の頭数が減少するから、数字的な穴埋めということをよく考えるのですね。実は、私や村木さんは稚内市である程度、移住体験住宅というのに入って、結果今に至るのですけれども、市議会で議員から質問が出て、そうすると、これまで何人の移住者か、と聞かれて、それは完全移住1人と季節移住が1人でございますって、確かに工藤市長が答弁されたというのが新聞に載っていたのですが、完全移住がこちらでした。季節移住は私です。この2人だけだということです。

でも「この2人がこういう移住者促進のための施設をつくったという素晴らしい成果を残しています」と、ちょっと工藤市長にぜひ議会で答弁していただきたいなと思うのですけども。それは冗談ですけれども、何が言いたいかというと、頭数が減るから、頭数を受け入れるという話ではなくて、こういう地域にない人的資源を受け入れていくという形での、量ではなくて質ということでこの地域の移住を考えていかないと駄目なのではないかと思っております。

ご静聴ありがとうございました。

道北の地域振興を考える研究会 報告



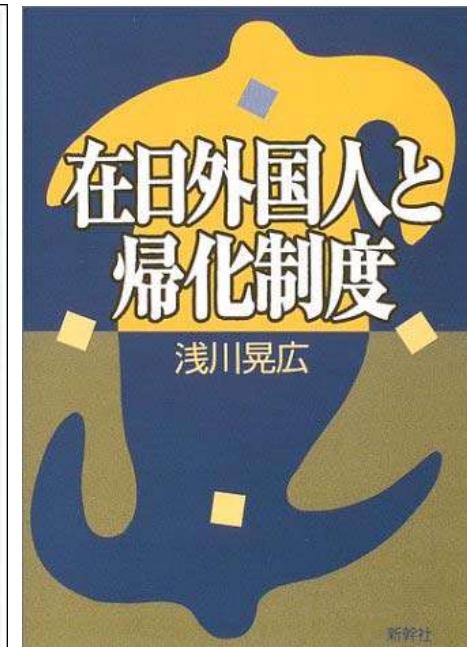
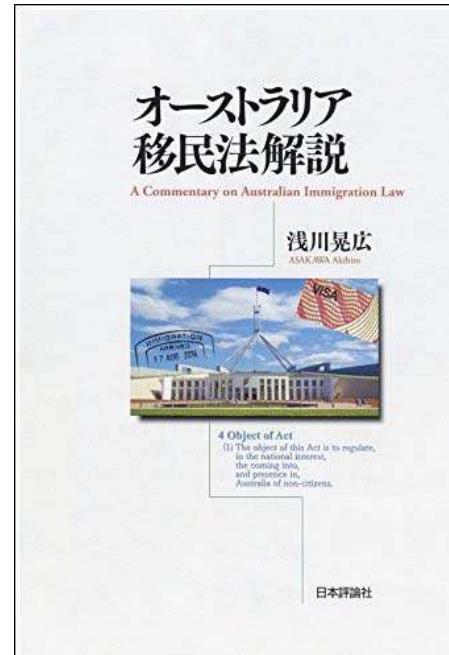
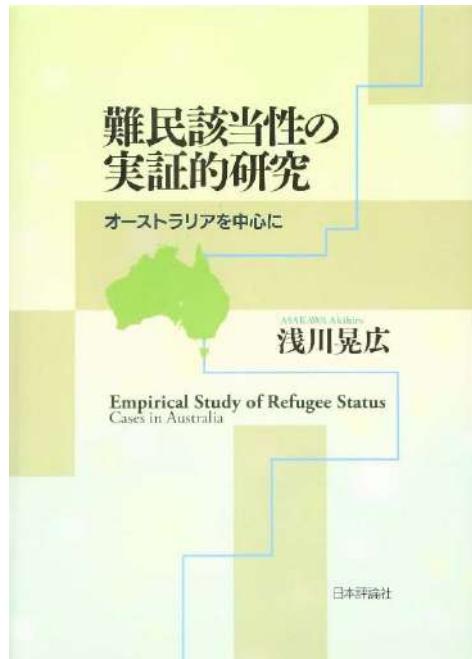
人の国際移動からみた 国内移住



きた北海道移住支援型シェアハウス
キックスタート！ 代表・浅川晃広
(名古屋大学大学院国際開発研究科・講師)

自己紹介

本業：名古屋大学大学院国際開発研究科・講師（こっちが副業かも？？）
豪州滞在歴合計3年、合計20か国を訪問
世界で一番稚内が大好きになり、2017年9月から酪農地帯に一軒家を借り、二地域居住開始
2019年3月にキックスタート！開設を決意、同年8月オープン



専門：入管法、移民法、難民法、豪州政治

海外渡航(20か国)

オーストラリア(3年居住)
ニュージーランド
韓国
ベトナム
ロシア
ウズベキスタン
タイ
ラオス
カンボジア
トルコ
ウクライナ
中国
ブラジル

フィリピン
モンゴル
エジプト
ガーナ
ケニア
モザンビーク
インドネシア



浅川晃広(あさかわ あきひろ)はこんな人物です！



1974年2月生まれ(45歳) O型 神戸市出身

海外渡航歴20か国、うちオーストラリアには合計3年居住



←名古屋と稚内で二地域居住(2017年9月から)

稚内で移住希望者のためのシェアハウス
(キックスタート！)を経営(2019年8月から)

→→→



趣味

- ①稚内に住むこと
- ②ドライブ(きた北海道限定)
- ③本/論文/ブログなどの文章執筆
- ④写真撮影(スマホ)
- ⑤読書

好きな食べ物

- ①お酒(とりわけサッポロクラシック)
- ②ジンギスカン(ラム肉)
- ③ホタテ
- ④音威子府そば
- ⑤アスパラガス



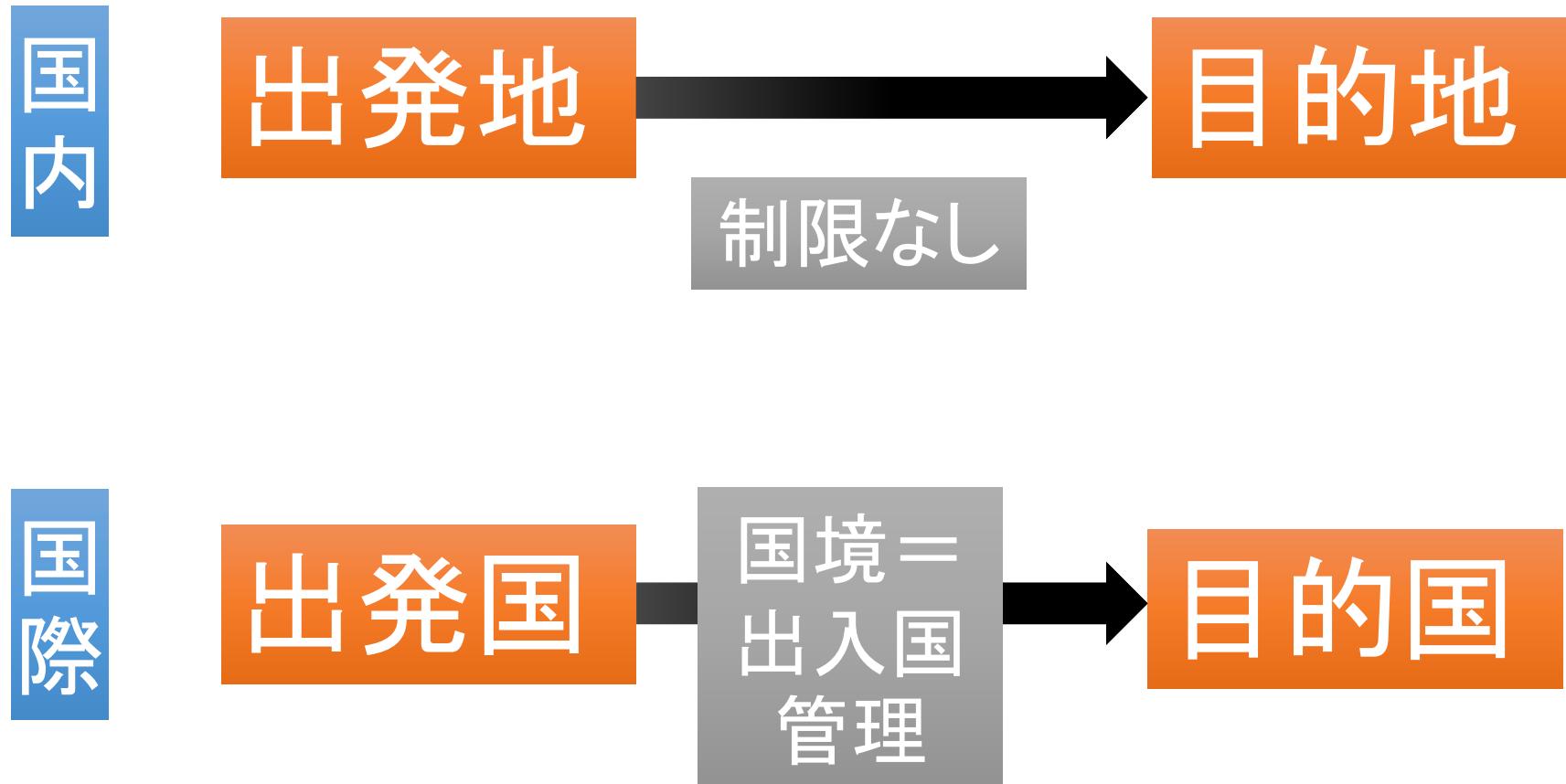
座右の銘

Wealth is created, not distributed.

富は創り出されるものであって、分配されるものではない

①国際移動と国内移動の違い

国際移動と国内移動の違い(法的)



国際的な人の移動の二つの選別

①国家による選別



アメリカへ行く航空券が20万円で、これが買えるけど、ビザが取れないから行けない

②コストによる選別



アメリカへ行く航空券が20万円で、これが買えないから行けない。

コストによる選別によって移動ができない場合、
国家による選別以前に移動が制限される

国内移動ではコスト面(経済面)での制約が残る
←克服可能

在留資格の種類

就労が認められるもの

外交
公用
教授
芸術
宗教
報道
高度専門職
経営・管理
法律・会計業務
医療
研究
教育
技術・人文知識・国際業務
企業内転勤
介護
興行
技能
技能実習
特定技能

活動に基づく在留資格 (別表第1)

就労が認められないもの

文化活動
留学
研修
家族滞在

特定活動
法務大臣が個々の外国人について特に指定する活動

身分・地位に基づく在留資格 (別表第2)

永住者
日本人の配偶者等
永住者の配偶者等
定住者

合計29種類

外国人はこれらの在留資格の要件に合致しなければ、日本に在留できない！(いくら金を持っていても)

スキル面での国際移動と国内移動の違い

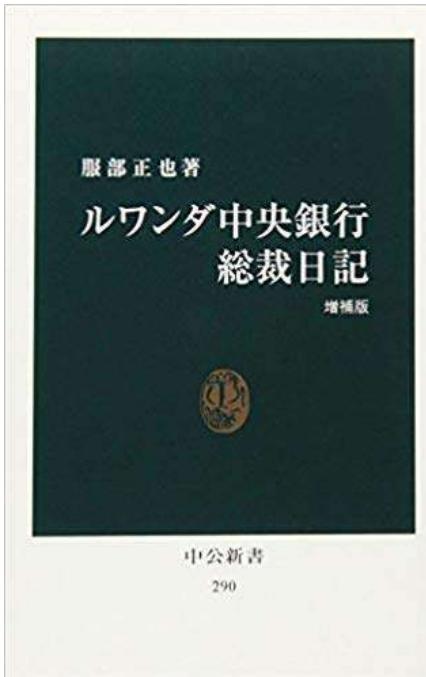
| | 国内 | 国際 |
|----|----|----------------------|
| 言語 | 同一 | 基本的に違う |
| 学歴 | 同一 | 劣化(超一流大学ではないと認知されない) |
| 資格 | 同一 | 限定(認証制度があるもののみ移転可能) |

国際移動のスキルの劣化が著しい→社会経済的地位の低下

国際移動と国内移動の違い(まとめ)

| | 国内 | 国際 |
|-------|---------|-------|
| 出入国管理 | なし | あり |
| 費用 | 国際よりは低い | 比較的高額 |
| スキル | 同一 | 大幅に劣化 |

②道北地域での人的資源の課題



「途上国の発展を阻む最大の障害は人の問題であるが、**その発展の要素もまた人なのである**」

服部正也「ルワンダ中央銀行総裁日記」(中公新書)

大学は一つのみ 稚内北星学園大学



ほとんどの高卒者は**地域外の大学・専門学校に進学せざるを得ない**

自宅から通学可能な大学が多い
都市部と違う**大きなデメリット**

結果としての若年層の流出

大学が一つしかないこと のデメリット

日刊宗谷2018年12月15日



大学生の定番バイトの家庭教師がいない

8年ぶりに国公立の合格者 (進学希望56人中4人)

小中高生が安価で学校外で勉強できるインフラがぜい弱

教育上のアウトカムが低い

国公立大に4人 全体の進路決定率94%

人的資源の脆弱さの典型例（医療過疎）

稚内プレス2019年1月28日

常勤医不在の影響

稚内消防署 昨年搬送 名寄、旭川などへ116回

稚内消防署は昨1年間の救急車などによる管外搬送出動状況をまとめた。常勤医不在が続く循環器系の病気で名寄等への搬送・転院が7割を占めている。

昨年の管外搬送は道北ドクターヘリ41回、メディカルディング4

回、防災ヘリ7回、救急車による搬送64回の合計116回。同署によると、全体の7割が循環器の病気の要請で名寄、旭川などへの搬送で占められている。

市立稚内病院の循環器科の常勤医が不在となる前は全体で管外搬送は50回前後だったが不在となつた以降は年々増加の一途を辿り、平成21年から導入されたドクターヘリに關しても運用開始して数年は年20回前後の出動だったのが、この数年は40回前後まで増えている。

（同6減）南73人（同14増）東57人（同8減）声問1人（同4減）増幌3人（同3増）宗谷6人（同5増）大岬5人（同5減）富磯2人（同変わらず）港13人（同2増）潮見が丘72人（同16増）天北5

循環器医師

稚内市立病院に循環器の医師が存在しない

医療環境を心配する高齢者の流出にもつながる

人口減少(社会減)の進展に拍車

人的資源が脆弱なこの
地域で、移住者が活躍で
きる余地とは？

特定業種における人手不足=人的資源が脆弱

日刊宗谷2019年9月22日

稚内管内の求人倍率

全体1.59倍
(全国1.59倍、北海道1.23倍
(2019年8月))

事務職 0.27倍
軽作業 0.54倍

專門技術

(建築、土木、測量技術者、
看護師、保健師)5.47倍

①同じもの



物質的には都市と遜色ない

②あるもの



都市ではあり得ない大自然、
低人口密度
濃密な人間関係

③ないもの

都会では当たり前の、さまざま
なスキルを持った人々



教育関係



医療関係

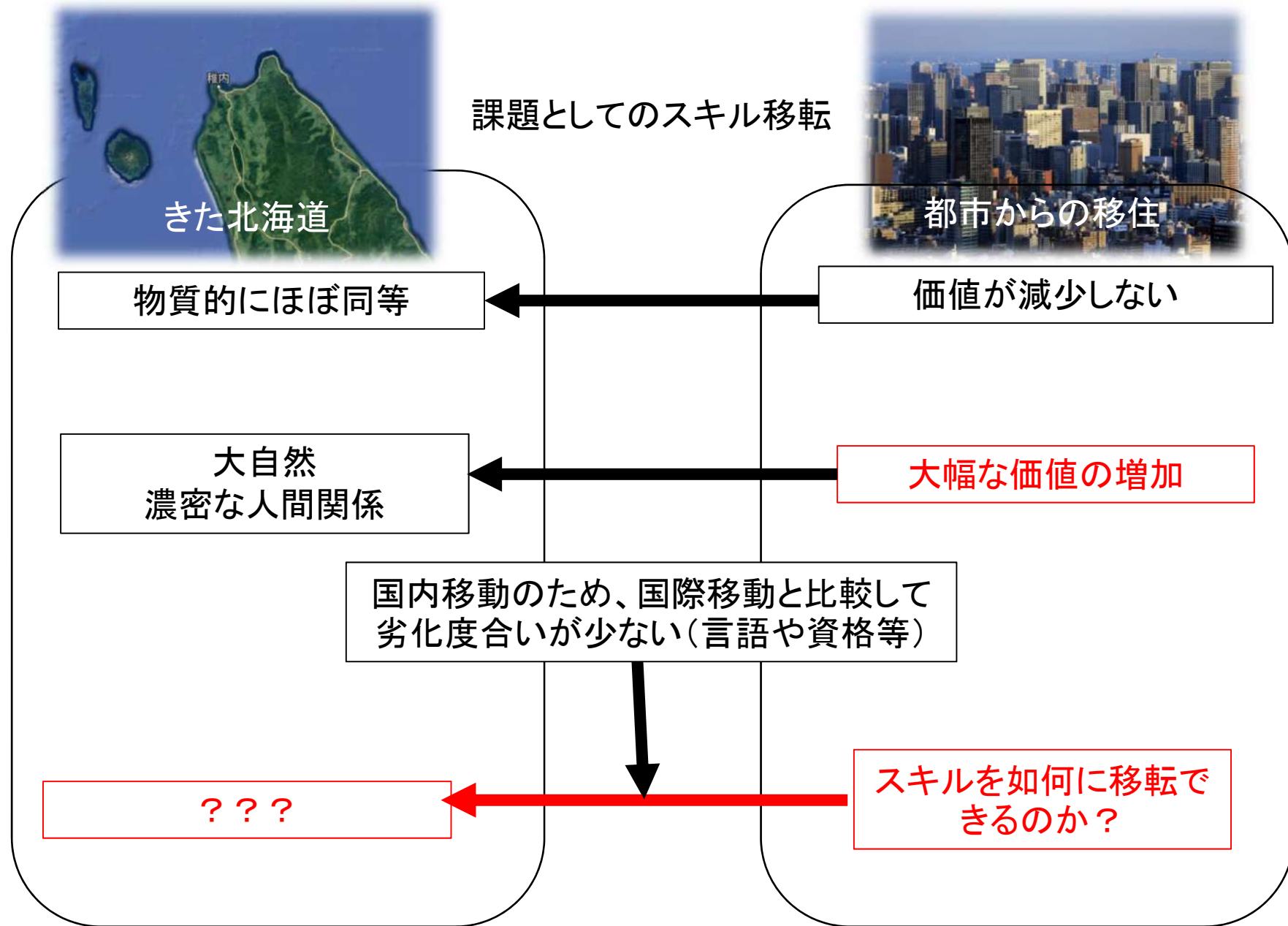


介護関係

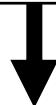


手に職系

スキルを持ち、自然に価値を見
出せるのであれば、移住の効用
は高い！



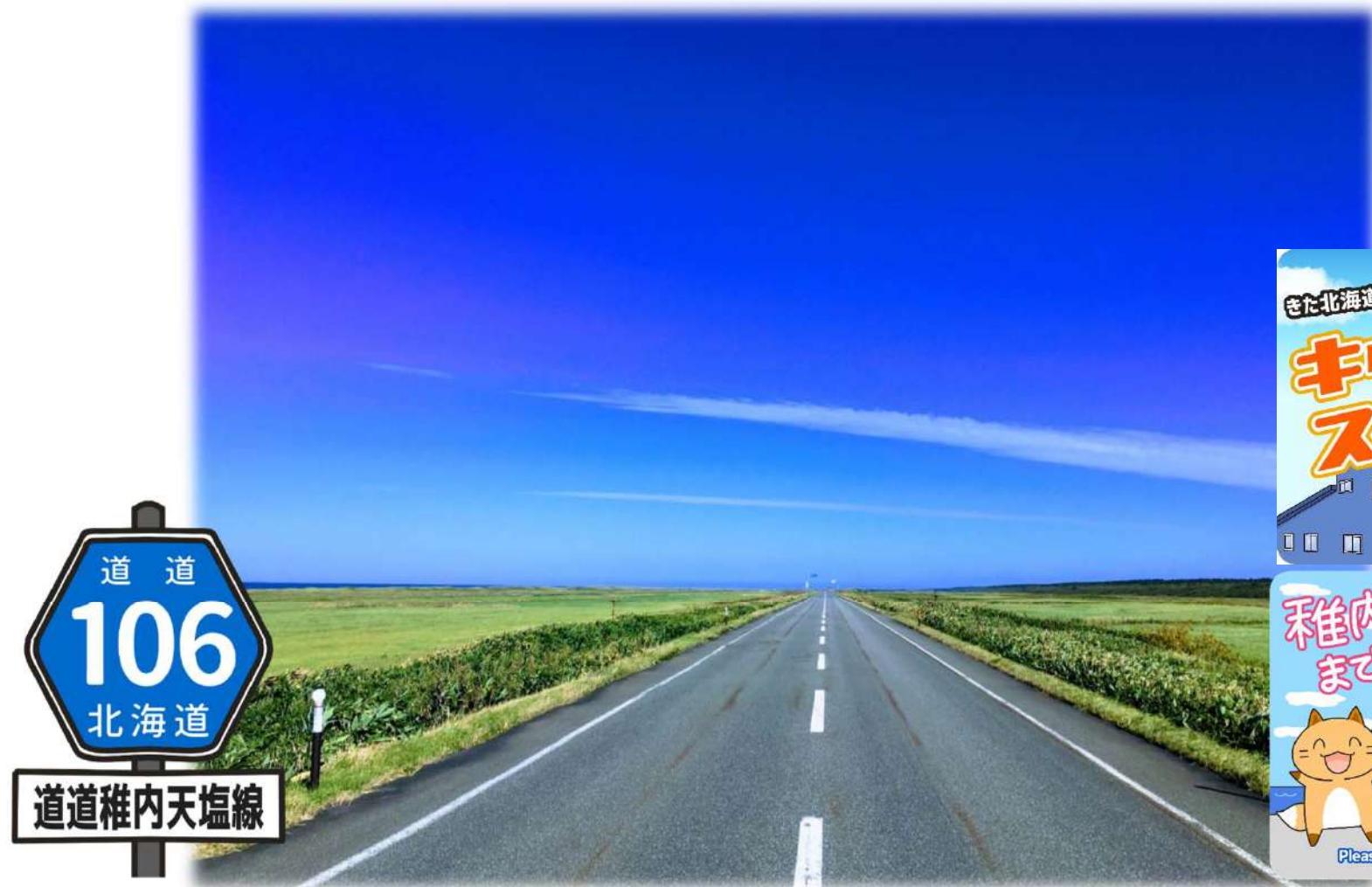
スキル移転・適合に成功する人材の受け入れ



地域全体の人的資源の増加
自然が豊かで文化的にも豊かな社会・地域になる可能性

人口の頭数(減少するから数字的な穴埋め)で地方移住を考えることの危うさ。「(人材の)量ではなく質」

ご清聴、ありがとうございました！



(3) 第2報告 代替不能な地域固有資源に起因する移住事例 菅原 英人（元・天塩町地域おこし協力隊）

皆さん、こんにちは。天塩町から参りました、菅原と申します。今日は、プライベートな立場でお話しさせていただければと思います。一応、天塩町の元・地域おこし協力隊ということで、菅原が私の移住にまつわる事例とそこからの考察というようなテーマで話をさせていただきたいと思います。

まず、簡単に自己紹介です。この写真のように趣味は釣りでございまして、隣にあるのは天塩川という川で、これが今日の私の移住のテーマのキーワードの一つです。私は神奈川県出身です。2012年に天塩町に地域おこし協力隊として移住して、今は役場で働いております。今日のキーワードは、「アトピー」と「幻の魚」ということです。

私が今、現在、住んでいる天塩町の紹介です。人口は今、約3000人で間もなく3000人を切りそうです。シジミが有名で名産です。北海道では2番目に長い川、天塩川の河口に位置するところで酪農と水産業の町でございます。豊かな自然があります。この川に、このキーワードになる「幻の魚」が生息しています。天塩町は、ご多分に漏れず、人口減少が進んでおりまして、ピークが昭和30年ぐらいで1万人ぐらいいた人口が今、3分の1に減少しているという状況でございます。

移住のファクターその1ですけども、この後、話をされる中島まなみさんも話をすると思うんですけども、移住のきっかけの1つめは豊富温泉です。地球上に二つしかない泉質、そういう温泉でございます。私は、もともと生まれつきアトピー性皮膚炎という、疾患を持っていて、中学、高校生ぐらいより、良くなったり、悪くなったりと、そういうのを繰り返しました。社会人になってから、結構、周期的に炎症が悪化することが度々あります。2009年ぐらいのことですが、これまでずっとサラリーマン、会社勤めをしていたのですが、顕著に悪化する時期がありました。2011年、ちょうど東日本震災の起きたぐらいの時に、どうしても仕事が続けられなくなって休職をしておりました。私は実は、だいぶ前から豊富温泉の存在を知っていました。一番、最初に行ったのは1992年ですね。1998年ぐらいから定期的に豊富温泉に湯治とプラスアルファのために度々訪れていました。プラスアルファというのは、あとで説明する部分です。きっかけになったのは会社を休職している時に、東京でたまたま「豊富温泉移住フェア」というのがあって、それに行って話をいろいろ聞いたところ、結構、移住している人のお話を聞いて、自分も「移住できるのではないか!」と思いました。ここから、移住を真剣に考えはじめて、まず仕事は何かあるのかな?ということで、偶然その直後に天塩町で地域おこし協力隊というのをインターネットで募集しているのを発見して、すぐ応募し、採用され、すぐ移住というような感じです。2012年の5月です。移住してから、ほぼ毎日豊富温泉に通いまして、半年ぐらいたったころには、劇的によくなっていたという状況でございます。この写真は、移住する直前ですが、こんな感じでもう顔だけじゃなくて結構全身に近いぐらいもう皮膚がドロドロになって、夜も眠れず、睡眠薬も飲んで、かなり、いろんな部分で生活にも支障を来たしていました。でも、この豊富温泉

という、もう、ここしかないというような形で移住したというわけです。

豊富温泉について簡単に概要をお話ししますと、大正末期にたまたま石油を掘っていたら、石油とガスと一緒に温泉が出たということで、石油の臭いがする、この中にいらっしゃる方はご存じかと思うのですけども、同じ泉質の温泉は地球上に二つしかないということで、もう一つは中央アジアにあるアゼルバイジャン共和国にあります、もっとヘドロみたいなどろどろの塊のような、そういう温泉です。豊富温泉は、昔から火傷に効くということで、その効能では結構有名だったようです。1990 年代の初頭に乾癬（かんせん）という、これも難病の疾患なのですが、これに効くということで話題になりました。2000 年以降になるとインターネットの普及とタイミングが一致するのですが、「アトピーに効く」と結構話題になって、このころ「アトピー・自殺」って検索すると、上位に豊富温泉のことが出てきたのです。「2ちゃんねる」というインターネットサイトがその当時、流行っていて、「自殺する前にここに行け、豊富温泉」というページがあったのです。そういうことで結構その当時から話題になっていました。

日本の名湯百選にも認定されています。2017 年に温泉利用型健康増進施設（医療費控除の対象施設）に認定されて、これは北海道では初めてです。要は、病院に通うのと同じで、その行為 자체が医療機関に行ったことと同じ扱いで所得税の医療費控除の対象になりました。あと、これ稚内北星学園大学ですね。平成 29（2017）年度から湯治目的で入ってくる学生さんは、最大で授業料を半分免除しますよということもやっていますね。今は、豊富教育委員会のほうで平成 28（2016）年度から小中高生を対象に湯治の目的で移住、滞在する方には、住宅費、交通費、入浴料、生活交通費を支援するということでいろいろ取り組みが動きはじめているということです。私とか、まなみさんとか尾崎さんとかも含めて、湯治を目的に移住した人というのが、この豊富、幌延、稚内、猿払、天塩、中頓別、こういったところで大体累計 70 名ぐらいということです。話を伺っております。ここ最近 3 年間だけでも 30 名ぐらいが移住しています。この移住の定義ですけども、住民票の異動は問わず 6 カ月以上滞在ということで、これコンシェルジュデスクさんのほうから伺いました。

この温泉を頼りに、この後、話をします中島まなみ先生のようなヨガインストラクター、システムエンジニア、デザイナー、プロの絵描き師、ジャズシンガー、ギター職人、パティシエの方とか、海外移住の経験者だとか、看護師とか、通常あまりこういう過疎地域ではないような、そういうちょっとレアな職業とか能力を持った方が移住、もしくは中長期で滞在をしているということです。先週、たまたま温泉に入って、京都の方で大阪や京都の百貨店とかでイラストを描いて売っているという若い方と一緒にました。何回か湯治に滞在された方が移住したいということで、年内には移住をすることを決めたという話を聞きました。

次の「移住ファクターその 2」について説明します。私にとって趣味というか、趣味を通り越した「釣り」です。小学生時代から釣りが好きだったので。今日も、この会場にイトウの専門家の方がいらっしゃっているのですが、地球規模で減少しているマニアックな魚、日本最大の淡水魚で「幻の魚」と呼ばれています。このイトウという魚、これは、釣りをしている人、釣りをある程度、やり込んだ人にとって憧れである三つの魚がいて、日本の三大怪魚と呼ばれています。

まずイトウですね。それとアカメという魚と、ビワコオオナマズです。共通しているのは、すごく希少性があつてめったに釣れない。それでいて船に乗っていけば、大型の魚って釣れるのですが、国内で陸上から釣れて1メートル以上の大きさになって分布域が限定されるという魚の一つがこのイトウという魚で、私も小学生のころに当時は流行っていた『釣りキチ三平』という漫画を見てから、いや、これ絶対に死ぬまでにこの魚だけは釣ってみたいということで、小学校3年生ぐらいのときに憧れました。私の場合、本当にそんな理由で移住したの？っていう方いらっしゃると思うのですけども、このイトウが目的で移住をした人というのが、私の知る範囲でも道北地域で大体7、8人ぐらいいますかね。そういう数が多いと見えるのか、少ないと見るのかはわかりませんが、そのために移住するという人も私以外にもいるということです。天塩川という川は、一級河川の本流域でこの幻の魚が狙えるというのは、もうこの川しかないような、シチュエーションがあります。

次に、勝手に私がつくったのですけど、「移住地決定の公式」。まず、最初に、地域に対して期待するイメージというのがあって、それが、まず大自然を求めるとか、利便性とか、快適性とかを求めている人、それぞれ価値観って違うのですが、やっぱり具体的にその地域に期待するイメージがあると思います。そのイメージの良さ、が最初にあると思います。あと当然、生活をするからには、仕事、収入があるということです。それが人によって、やりがいを重視するのか、実際の収入を重視するのかという差はありますね。あと私みたいに趣味を含めた「生活」に利便性だとか、快適性だとか、そういうものをどれだけ重視するかという、ライフスタイルの総和値といいますか、そういう部分があります。さらに私が思うのは、これがその地域でしかできないことか？という固有性、固有度、「ここでないとできない」という、そういう要素がどれだけ「掛け合わせられるか」というのがあると思います。私は、独り者なので、その部分が、どちらかというと、仕事よりも生活、趣味、自分のやりたいことを結構重視できる。同じように、「趣味に生きるんだと」思っていても、家族がいたりしたら、それはハードル上がるかと思います。私の場合でいえば、その地域のイメージというのは、事前に結構出来上がっていました。仕事についても、偶然、地域おこし協力隊というのがありました。固有性のある資源として、「豊富温泉」と「幻の魚の釣り」という部分があつて移住に至ったのです。

ここからマーケティングの観点から考えてみたのですが、よくビジネスとかで聞く言葉で「マーケットイン」と「プロダクトアウト」って、たぶん聞かれたことあると思うんですけども、大きくプロダクトアウトというのは、簡単に言いますと、商品やサービスの提供者メーカー側の視点でこういう技術でこういう製品を、商品、サービスを開発して提供すれば、それでいいという考え方。マーケットインというのは逆ですよね。客が何を欲して買いたいと思っているのか、そういう視点を重視して、それに合う商品とかサービスというは何なのかということから捉えて、サービスなり商品をつくって提供するという考え方。よくビジネスの本とかに、マーケットインのほうがこの時代には求められるという、そういう観点で書いてあります。私もいろいろ考えたのですが、マーケットインを突き詰めることによって、移住者という顧客に対して、ズレとかギャップを最小化する方向には持つていけると思います。ただ、そのお客、移住者というのは本当

のニーズに気付いているのか？と思います。両方の考え方というか、概念が必要なのかなと思います。

移住者というのは、潜在的に心の底で思っているニーズって実は自分で気付いていなかつたりするのではないか？だから、そこに対して地域側が提供できるものは何のか？というのをちょっと考える視点が必要なのではないかなと思います。これは、経営学で有名な、「事業の目的は、顧客の創造である」という言葉をドラッカーが言ったんですけども、この過疎地域ほど、人という資源、そこの部分の価値を創出していくということを念頭に考えていく必要があると思います。よく、人材論で「1万時間の法則」って聞いたことある方いらっしゃるかと思うんですけども、これ、一つのスキル、資質を獲得するのに、もう、がむしゃらに1万時間やる。そうすると、100人に1人の存在価値、レア存在になります。これを2分野やることによって、掛ける2乗で1万人に1人の希少性に、価値になることがあります。これを地域の場合で考えてみると、よくあるのが「うちの町は自然が豊かで空気、水がおいしくて、取れたての野菜とか魚が食られます」という部分があるんですけど、これって、これと同じことが言える地域って結構、日本中にはいっぱいありますね。北海道の中だけでも、おそらくいっぱいあると思います。なので、これ「条件不利地」ってそういう言い方をしたのですが、分かりやすい資源とか、そもそも有名な観光地じゃないところ、あまり世間的にそんなに認知度が高くないところだからこそ、戦略が求められると思います。ランチエスター戦略っていう法則があるんですけども、弱者戦略という中に特定分野に徹底して資源を投入するという考え方です。要するにうちの町は食べ物がおいしいとか、空気がきれいだとか、そういうのは、「レッドオーシャン」ってかなり競合他社が多数ひしめいています。それを避けて、ブルーオーシャン戦略、どこもやっていないところに特化していくという考え方が必要だと思いました。なので、その有形無形の資源 자체を、どんどんプラスアップしていく、固有性に価値と情報を付けて、それを複数分野持つということが求められるかと思います。1,741って日本全国の自治体の数なんんですけど、それぞれに一つの固有価値になるものがあるのではないかと思いました。

次に、私が移住するきっかけになった地域おこし協力隊なのですが、平成21（2009）年から制度化されて、ちょうど10年目を迎えるのですが今、全国に大体5500人ぐらいいて、都道府県別でみると北海道はその内、圧倒的に多くて、今670名以上いますね。応募条件としては、三大都市圏など都市地域に住んでいる人が条件不利地に住民票を移動するというのが条件になっています。給与分が年額200万と活動経費が200万の合計400万が国のほうから入ってきて、最大3年間これが得られますよということです。天塩町は平成24（2012）年、私が移住してきた年から実施して、これまで累計15人が着任しているんですけども、内半分は大体地域に残っているような感じです。全国的な統計で見ても、大体5割～6割ぐらいがそのまま地域に残っているということです。現在、天塩町では4名在席しております、豊富町では今年から1人健康運動指導士の方が着任されております。ちなみに稚内市は、募集できるんですけども、まだやっていないという状況ですね。これもちょっと参考までに、地域おこし協力隊、は、どんどん増えていっているんですが、隊員が圧倒的に多いのは、北海道と長野が突出して多くて、その次に岡山、島根、高

知となっております。全体の7割ぐらいが20代から30代で、その内約半分弱が女性の方。任期終了後、6割ぐらいが、そのまま地域に定住しているという状況でございます。

次の話題ですが、最近、地方創生とか、地域活性化の中でよく聞かれるキーワードになっている言葉で、「関係人口」ってたぶん、聞いた方もいらっしゃるのではないかと思います。来年度から国は地方創生総合戦略、地方創生事業の第2ステージということで、この関係人口というのが結構キーワードになるとされています、この図で説明すると最初は「知っている」とか、「行ったこと」がある。それ以前に知らないとか、行ったこともないというのがここから枠外になってしまふのですけども、そこから始まって、この4象限を見たときに、今、「知っている」から地域のファンを増やそうということで、ふるさと納税とか、地域に来てもらうための格安ツアーとかを結構やったりしているところもあるのですけども、そこからどんどん、関わり度を強めてって、最終的には、中長期の滞在とか、定住とかいう形でその地域に住民に持っていくという発想ですね。それとは別に、もともとその地域の出身者とか、親、兄弟、親戚なんかが住んでいるので、縁があると、その中には、「いつか戻りたい」という思いをどこかに持っているという方がいて、関わり度が上昇することによって移住するということはあり得ると思います。この三角のピラミッド図で、もともと地域って、高度成長期ぐらいまでって定住している人だけが全てであって、観光地は別ですけども、住んでいる人のことしか、たぶん眼中になかったと思います。そのステージから、今だんだん人口減少という時代に入って、経済成長もかつてほどではない状況の中で、地域をこれからどうしていこうか、稼いでいこうかという部分で、外部との関係性をどんどん築いていこうという次のフェーズがあるかと思います。さらに、今までに関係人口というキーワードがクローズアップされて、ふるさと納税、イベントツアーなんかで、お互いに地域のほうは売り込みをして、消費者は潜在的移住者みたいな方、地域のファンみたいな方がそういったお買い得なツアーやイベントというもの、「お互いが結構、駆け引きをする」という言い方がちょっと適切かどうか分からぬですが、今、この段階にある地域って結構いっぱいあると思っています。お互い、かなり利害関係を意識しているのではないかと思います。結局、それでお互い消耗戦に入っているような感もあります。でも、最終的にはそれを超えて、そういう消費的なものとか、利害を超えた関係性を、その先に求めるべきだと思います。意外に豊富温泉、豊富というところは、私も、いろいろ関わって思ったのは、この後の中島まなみさんの話にも出てくるかと思うんですけど、そういうお互いに地域への感謝だとか、信頼だとか、そういう利害を超えたものというのが結構あるのかな?というふうに思います。それは、やはり、いろいろ特殊な状況というか、お金には代え難いようなものというのが、そこにあるように思います。

次に仕事論について、ですが、地域に移住するってなると、やっぱり絶対的に仕事どうするのよ?ということになると思います。よく言われるのは、「地域には仕事が無い」ということで、仕事とか雇用をシェアリングできないのだろうか?と。

今後、天塩町もそうなんですけども、どんどん人口減少していくということで、一番問題なのは、単に人が減るだけじゃなくて、その地域としての相対的な人口キャパ、母集団が減ってくることによって、いろんな面の人材が不足してくるのと、人材の質自体もちょっと低下するんじや

ないかって懸念があります。過疎というのは単に人の数とか、お金がなくなっていくことだけじゃなくて、知見だとかスキルというのが減少していくと思います。もともと地域の良さでもあるのですが、同質性とか閉鎖性という部分がそこに拍車を掛けてきます。なので、今こそ多様性、、とか流動性という、ことが大事になってきます。「流動多様創生」勝手につくった言葉ですけども、そういうものが求められるかと思います。新聞記事の見出し、8月に結構話題になったんですけども、兵庫県の宝塚市で就職氷河期世代に向けた中途採用試験を行いました。3人の募集枠に対して1800人以上が応募して倍率600倍ということです。この新聞記事の中で宝塚市長が、「氷河期世代の多くには、人に支援が必要と本当に実感したと。ただ、宝塚だけでは砂漠に1滴の水を落とすようで、ほかの自治体の採用を広げてほしい」というコメントが載っていました。実際、就職氷河期世代全体で1700万人ぐらいいるといわれています。先ほど、浅川さんの話の中でも仰ってましたが、地域によっては事務職をほとんど募集してなかったりするんですよね。そういう部分に関して、役所の仕事とかも今後のことを考えると、そういうことも考えるべきなのではないかと思います。あと、北海道の中で似たような事例として、つい最近、余市町が地域戦略マネジャーを副業、兼業で募集したところ、1カ月で450人ぐらい全国から応募があって、その内2人を採用したということがあります。何を言いたいかというと、特に自治体とかの人材とか資質というのは結構限りがあるって、さらに前例にとらわれないことに直面しながらやっていくという状況の中で、人材って結構、大事です。それを外部から採るという考え方方が求められるんではないかと感じました。以上でございます。ありがとうございます。

「地域固有資源」による自己移住事例・考察

天塩町 元・地域おこし協力隊

菅 原 英 人



自己紹介・1



神奈川県出身

2012年：天塩町に移住



キー・ワード：「アトピー」「幻の魚」

天塩町はこんな町



- 人口 約3,000人
- 「しじみ」が名産「蝦夷の三絶」
- 最北の大河「天塩川」の河口
- 酪農と水産業の町
- 豊穣な自然「オジロワシ」（天然記念物）

幻の魚「●●●」（絶滅危惧種）が生息

- 過疎化（人口減少）（60年間で1/3に減少）



移住ファクター（1）

豊富温泉

豊富温泉「地球上に2つしかない」



〔移住の「きっかけ」その1〕

生まれつきの「アトピー性皮膚炎」

中高生時、社会人時に周期的に炎症悪化

2009年頃、顕著に悪化⇒脱ステ失敗、2011年～休職

(1998年から、定期的に豊富温泉に湯治 + □の経緯)



2012年1月「豊富温泉移住フェア」（東京）参加⇒移住を目指す直後、偶然、隣町「天塩町地域おこし協力隊」の募集記事を発見
⇒応募⇒採用⇒移住（2012年5月）⇒半年～1年で劇的に回復

移住ファクター（1）豊富温泉

豊富温泉 「地球上に2つしかない泉質」

- ・大正末期、石油試掘→天然ガスと温泉が噴出
- ・油分（石油臭）温泉（もう1つは中央アジア「アゼルバイジャン共和国」にある）
- ・昔から「火傷に効く」
⇒1990年代初頭「乾癬（かんせん）」に効く！
⇒2000年代～「アトピー」に効く！口コミ（ネットの影響）
「アトピー 自殺」検索上位に表示



移住ファクター（1）豊富温泉

豊富温泉 「地球上に2つしかない泉質」

豊富温泉 × 稚内北星学園大学



- ・「名湯100選」認定（H27）
- ・「温泉利用型健康増進施設」（医療費控除の対象）認定H29（北海道初）
- ・稚内北星学園大学 「湯治目的の入学生」授業料1/2免除（H29～）
- ・湯治留学支援事業（豊富町教育委員会） 「小中高生」対象（H28～）
「住宅費」（1/2補助） 「交通費」 「入浴料」 「生活交通費」を支援

「湯治目的」の移住者（※）累計70名超（直近3年間で約30名）

※6ヶ月以上の滞在・住民票の異動問わず。 （豊富温泉コンシェルジュデスク調べ）

豊富町、幌延町、稚内市、猿払村、天塩町、中頓別町

移住ファクター（1）豊富温泉

豊富温泉 「地球上に2つしかない泉質」

移住/滞在者には「こんな人が！」

「ヨガ・インストラクター」「システムエンジニア」

「DTP/WBデザイナー」「絵描き師」「ジャズ・シンガー」

「ギター職人」「パティシエ」「海外居住経験者」「言語聴覚士」「経営コンサルタント」「イラストレーター」

「看護師」

過疎地では、レアな職業/スキル

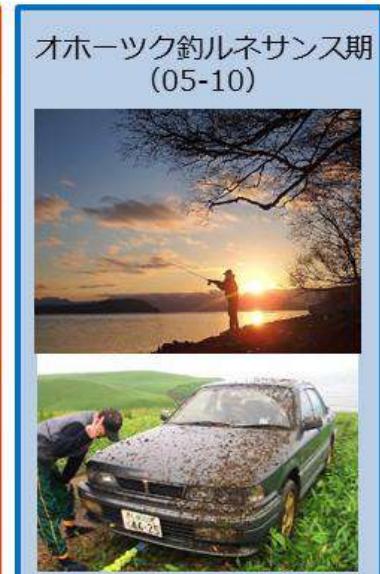
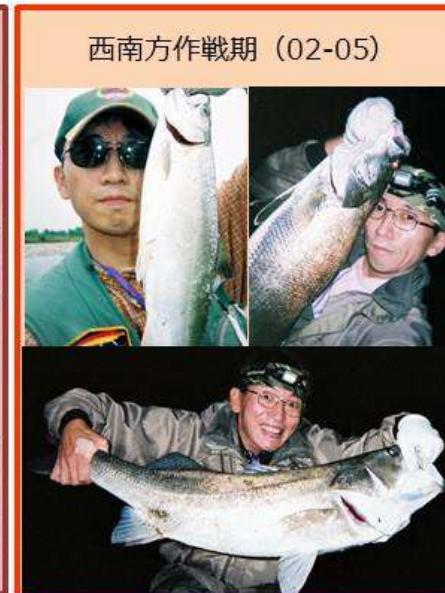
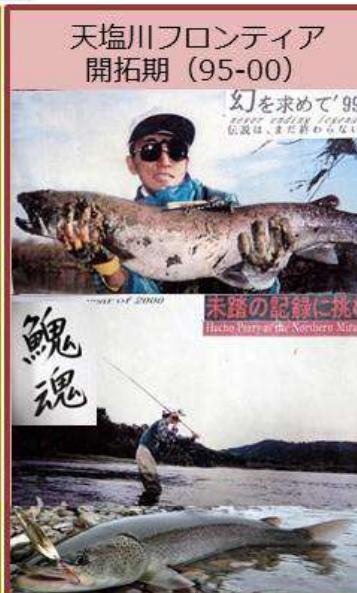
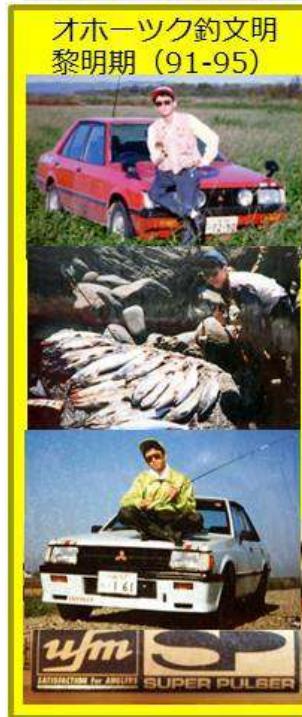
豊富町、幌延町、稚内市、猿払村、天塩町、中頓別町

移住ファクター (2) 「幻の魚」

私：人生の愉しみ/生き甲斐は「釣り」



平成 釣戦史30年の歩み 1989>2018
そして次世代を釣る



第2次・天塩川/道北フロンティア期
(2012-)



| Fishing type | 投、ブッコミ | ショア: ルアー&フライ | | | | | | ウェーディング・エギング | | ショアジギング・フラッキング | | ウェーディング・ショアジギング | | | | | | | | | | |
|---------------|------------|--------------------------|----|----|----------|------------|----|--------------|----|----------------|-------------|-----------------|---------|----|----|--------------|----|-----|----|----|----|----|
| Fishing place | 多摩川 東京湾 | 港、溪流、湿原河川 | | | 中大河川、サーフ | | | 港湾サーフ山岳渓流 | | | 湖・屋原河川・機サーフ | | 大河川/サーフ | | | | | | | | | |
| Living area | 川崎 | オホーツク | | 札幌 | | | 横浜 | | 愛媛 | | オホーツク・知床 | | 横浜 | | | | | 天 塩 | | | | |
| 移動ユニット | SUZUKI-TS | A175(前期) Kawasaki KDX | | | O53A | E33 GALANT | | | | | | | | | | SG5 Forester | | | | | SJ | |
| 平 成 | 元 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| 西暦 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |

移住ファクター（2）「幻の魚」

イトウ「世界規模で減少/絶滅危惧種」

高マニア度

コアな釣り人（ルアー釣）が憧れる「幻の魚」

【日本の三大怪魚】「イトウ」「アカメ」「ビワコオオナマズ」



絶滅危惧IB類 (EN) (環境省レッドリスト)



「希少種」（めったに釣れない）「大型」（1m以上）「分布域が限定」「陸上から狙う」

「イトウ釣り」のために移住した人 ⇒ ● 名

移住ファクター（2）「幻の魚」

天塩川：幻の魚「イトウ」が最多生息

唯一：「1級河川の本流域」で狙える！



選ばれる地域考察

居住地決定 公式

ライフ・スタイル総和

期待イメージ

×

仕事（収入）

+

生活（趣味）

×

固有度（ここだけ）

期待イメージ：地域での希望感/楽しみ

仕事：「適正」（やりがい）「収入」



生活：「生活/社会インフラ」「趣味」

【仕事（収入）（教育）】 単身者 < 家族持ち
【生活（趣味）（嗜好）】 単身者 > 家族持ち



選ばれる地域考察

例 「私」の場合

期待イメージ

×

仕事

+

生活（趣味）

×

固有度（ここだけ）

豊富温泉（固有価値①）



+



幻の魚・釣り（固有価値②）

移住マーケティング思考

2つの概念 「マーケットイン」 「プロダクトアウト」

プロダクトアウト：提供者側視点で商品（サービス）を開発/提供

⇒「この町は、〇〇がある、〇〇ができる！」

マーケットイン：客（ユーザー）側ニーズで商品（サービス）を開発/提供

⇒「移住者が求めているのは〇〇、必要とされる〇〇」

一般論として「二元論」「現代はプロダクトアウトよりマーケットイン」？

移住者ニーズとのズレを最小化？

移住者が本当のニーズに気付いていないかも？



融合が必要

移住者の潜在的（深層）ニーズ
⇒地域が提供できるものは何か？

「事業の目的は、顧客の創造である」P·Fドラッカー

過疎地：人＋資源 価値の創出を求めるべき

選ばれる地域考察

(例) 人材論 「1万時間の法則」

(1つの資質獲得に1万時間費す) ⇒ 100人に1人の存在価値
× 2分野 = 1万人に1人の希少(固有)価値

単に「豊かな自然」「空気(水)が美味しい」「とれたて野菜/魚」だけでは
レッドオーシャン(競合多数)で苦戦

条件不利地(お金・わかりやすい資源・世間認知度)が無いからこそ
⇒ ランチエスター戦略(法則) 「弱者戦略」 「局地戦(特定分野)
(広域戦・レッドオーシャンを回避) ⇒ ブルーオーシャン戦略」

資源のブラッシュアップ
(固有性+価値+情報)

×

複数

= 1,741のうちの 1つの固有価値

「地域おこし協力隊」とは



- ・ 総務省が平成21年より制度化
- ・ 現在・全国に約5,500人（うち北海道は約660名）
- ・ 条件：三大都市圏、都市在住者を過疎地へ移住
- ・ 待遇：年額200万円（給与）+ 200万円（活動経費）
- ・ 期間：最長3年間

天塩町では平成24年度より実施 これまで累計15人が首都圏や札幌から着任、うち7名が地域に定着（令和元年5月現在）

現役協力隊は、4名在籍（「地方創生担当」「インバウンド担当」「道の駅担当」「学習サポート担当」）

豊富町では、本年度より1名が着任

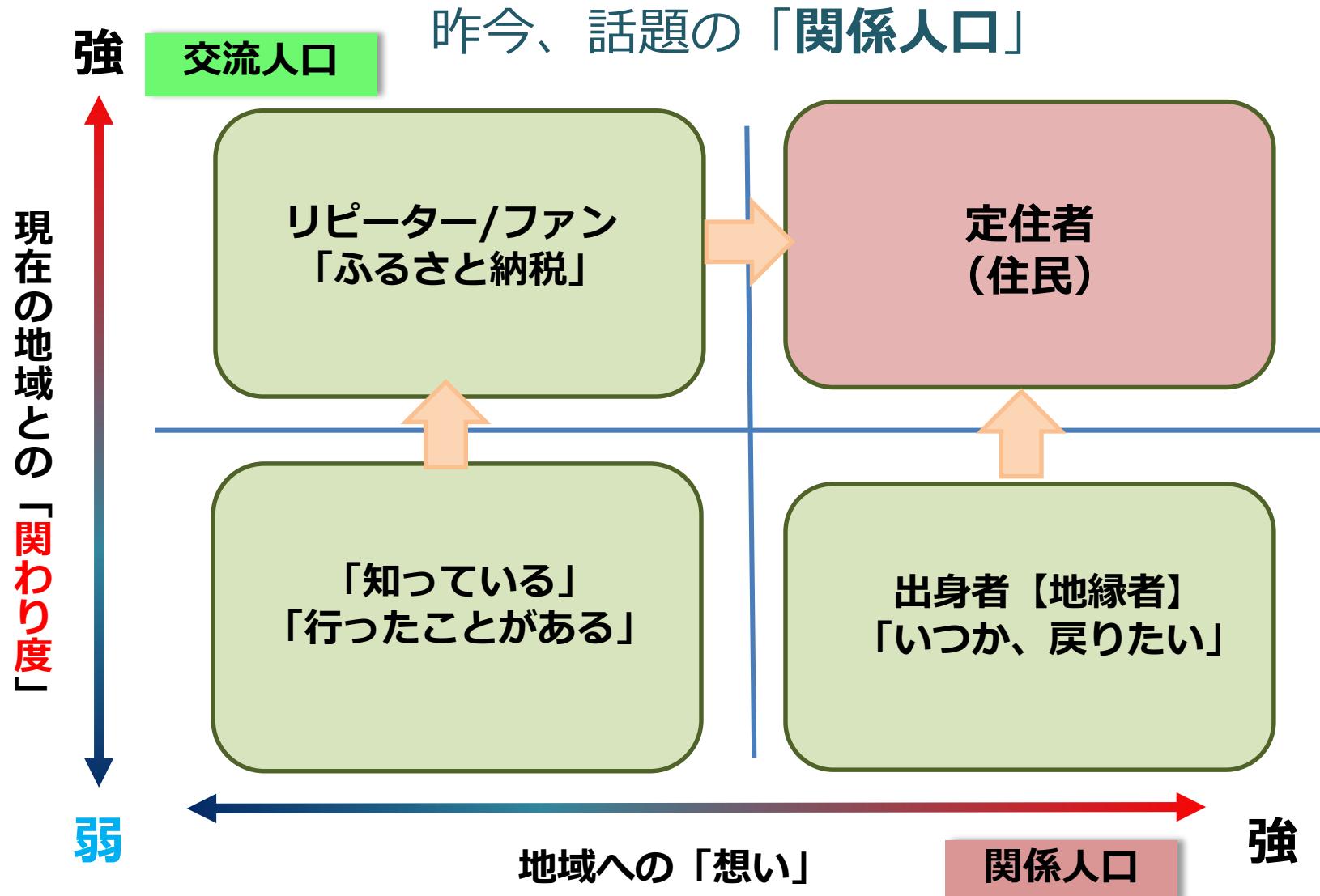
「地域おこし協力隊」とは



都道府県別の受入隊員数 (平成30年度特交ベース)



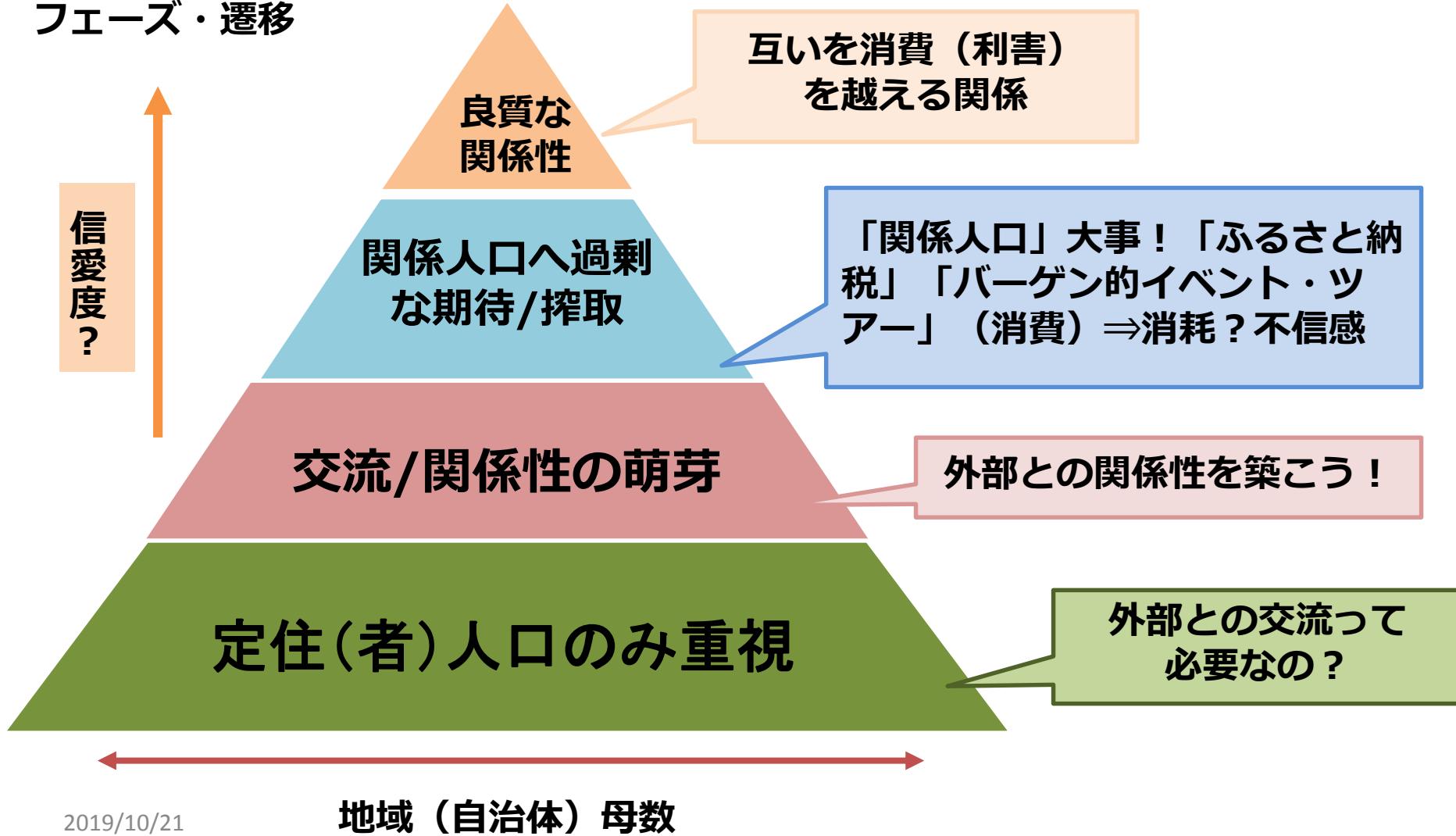
関係人口



関係人口 外部者との関係性

外部者との関係性

フェーズ・遷移



選ばれる地域考察（地域の仕事）

【定説】地域には仕事が無い

仕事/雇用のシェア

人口減少⇒母集団減少⇒人材の低下

神戸新聞 2019年08月31日 土曜日 面名 朝一 14 1ページ

過疎 ⇒ 「人」「力ネ」減少
より知見/スキルの減少が危機

同質性（同調壓力）／閉鎖性

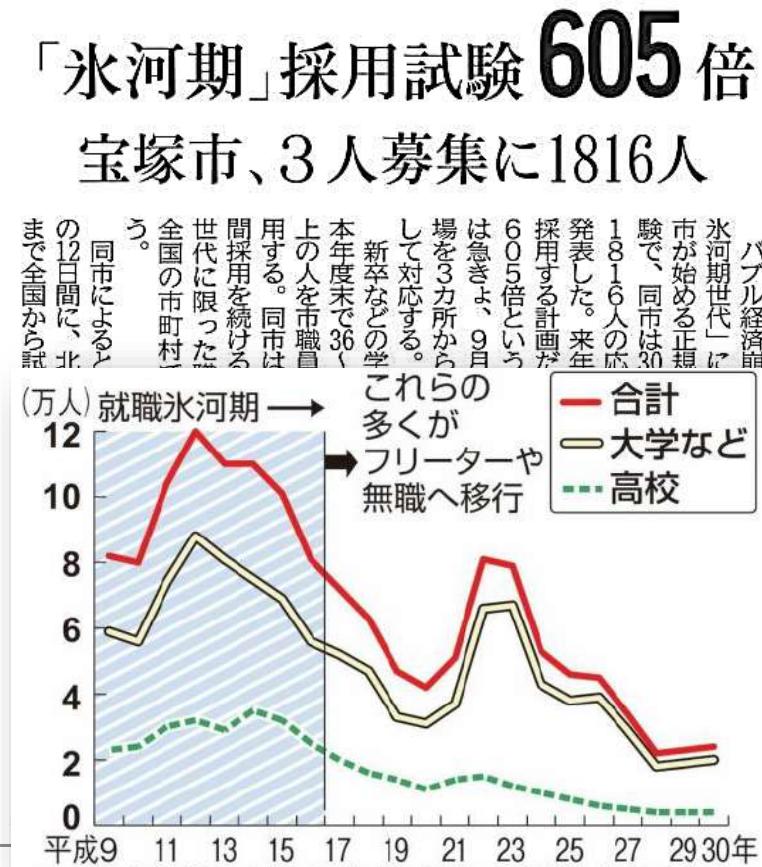
多様性 (ダイバーシティ)

流動性 (リクイディティ)

流動多樣創生

2019/10/21

道北の地域振興を考える研究会セミナー 2019



ご清聴 有難うございました！



北釣戦記:<http://blog.livedoor.jp/tesioitou175/>

(4) 第3報告 豊富温泉が与えてくれた第2の人生～地域に役立つ隙間を見つける柔軟な発想～ 中島 まなみ（沖ヨガインストラクター）

ありがとうございます。皆さんこんにちは。まなみんです。ぜひよろしくお願ひします。

頭、疲れていますか？ 皆さん、ずっと人の話を聞いていますものね（笑）。じゃあちょっとだけ。3分だけ遊んでいいですか？ どっちの手でもいいので出して。グーチョキパーをしながら、1から10まで数を数えます。声出してくださいね。せーの、1、2、3、4、5、6、7、8、9、10。はい、ではもう一回同じことをしますけど、反対の手で、これに負けるのを出しながら。ゆっくりになっても、どれだけスローになっても、皆さんの声がまったくなくなるまでやりますので大丈夫（笑）。

まだ終わらない。じゃ、しつこく反対の手に変えまして。これに勝つのをあと一回やります。グー、チョキ、パー、1、2、3、4、5、6しながら、これに勝つのを。今負けるのでしたので、勝つのを。だんだん1、2、3じゃない。だんだん声が小さくなりますけど、やってみてください笑 どうぞ！皆さんの様子を撮っておきたいですよー（笑）。あら。6はこう。できますか。では皆さん。これは今日の宿題にしたいと思います。

気分転換って、すごく大事です。今やったのは、脳活性化プログラム『シナプソロジー』と言いますが、そうやって言うと、多分皆さん頭の中には、認知症予防というワードが出てきますよね。このシナプソロジーですが、3年前だったかな、インストラクターの資格を取りました。主には、行政主催の『介護予防事業』でやっていますけど、今、シナプソロジーの研究所では、筑波大学の効果検証が入っていたりして、どんどん脳科学の分野からも新しい結果が出てきているんです。今では高齢者だけでなく、企業さんなどにもいっぱい入っています。例えば、人材育成のカリキュラムなどでは、受ける側も提供する側も、頭が疲れるわけですよ。気分転換してもらうと、頭には隙間ができる訳ですね。そう思うと、子どもたちの学習などにもこういう面白いものを入れたら良いと思うし。私は、健康の分野ですけど、やはり。大いに役立っています。

今日は、ごめんなさいね、私は本当に他の皆さんのような役立つ話ができませんが、ちょっと気楽に聞いてもらえたらしいかな、と思っています。私は、健康運動指導士という資格を持っていました。今はこの地域で活動をしていますが、愛知県瀬戸市というところの出身です。豊富町に移住して、今年で6年目になります。沖ヨガというヨガを伝えていいますが、皆さん聞いたことがありますか？今日はヨガの話ではないから、さらっとやりますけど、多分、皆さんが想像するのは、西洋のヨガだと思います。アメリカのパワーヨガとか、すごく格好いいポーズをとっているヨガは、ほとんどが西洋のヨガです。私が習っているのは、日本で生まれたヨガ。それは何？と言われたら。ヨガは皆さんインドで生まれたのは、何となくご存じですよね。そのインドで生まれたヨガに、日本の伝統文化とか、武道の要素なども入ってます。沖ヨガには、合気道の先生とかも結構いらっしゃいます。東洋医学、あと民間療法ってお手当などもそうです。手を当てる

お手当とか。そういうものを合わせて体系化されて日本で生まれたヨガが、沖ヨガなんです。沖正弘という先生が始めたので、沖ヨガとなっています。世界では、『沖道ヨガ』と言われています。私が学びお伝えしているヨガは、そんな感じです。結果的になんですけど、私は多分、パワーヨガとかの先生だったら、この地域ではやっていけなかつたのかもしれません。沖ヨガは、ゆっくりなポーズが多くつたり、ポーズをとることよりも整えるような動きが多くあるので、結果的にそれが、今私の活動の中では役に立っています。

スライドです。これは去年だったかな。地元の愛知でちょっと話をしてほしいと言われた時に調べた資料を持ってきたんですけど。話をしてもらいたいと言われたときに、何を話そうかなと思って調べたのが、瀬戸市と豊富町の違い。この時は、4年ぐらい前。移住して去年だと5年目だったんですけど、調べてみたんですね。瀬戸市は人口が今約13万人です。豊富町は、さっきお話をされた菅原さんは3000人切るって言われていたたけど、4000人切るぐらいです。私が移住した時は、4120人だったと思います。そこからさらに減って、ついに4000人を切りました。豊富町と瀬戸市では、広さとしたら豊富町は4倍の敷地面積がある。でも人口となると、豊富町は32分の1しかいない、と言うことでした。浅川先生のお話で、人口が少ないのが良いというのがありましたけど。私はよく稚内市へ行きますが、夜だと、稚内から豊富まで帰る時に誰一人としてすれ違わないというのも、珍しくない。それをたまには寂しくなるし、国道は、まだ携帯の電波があるからいいんですけどね。浜頓別町、中頓別町に呼んでもらうと、1時間も！電波がないんですね。これ、大変ですよね。もし事故をしたら、誰が助けてくれる？朝まで誰も通らないかもしれないというようなところが大変です。人口が少ないので混み合はずに素晴らしいんですけど。雪国なので、結構移動が必死！というところもあります。牛は、人間の約4倍もいます。豊富町は酪農が盛んで、豊富牛乳というブランドになっています。では、今日話したいなと思った事を3つにまとめます。豊富温泉の奇跡。これはさっきお話をされた菅原さんが、きっと豊富温泉の話をするだろうと思ったので、あまり詳しくは書いて来なかつたんですが、狙い通りでした、よかったです。その次、私の本業である健康という財産について。私が活動をする中で見えてきた、田舎と都会の違いということを話してみたいと思います。まず私は、移住してすぐから、豊富温泉のスタッフとして3年間働かせていただいて、今日、一番後ろの真ん中辺りに座っております尾崎君と一緒にでした。豊富温泉には、コンシェルジュデスクという総合窓口があって、彼は今、町営のふれあいセンターのスタッフとして働いていますが、そこは、全国から湯治療養にやって来る方の総合窓口になっていて、受け入れをしています。私は、3年間そこで働かせていただいて、その後に、今は完全フリーでどこにも雇われず、フリーのインストラクターとして活動をしています。その中で、フリーになった時、豊富温泉とのつながりが全くなくなっちゃうのもちょっと残念だなと思って、豊富温泉で活動を残したのがこれです。『とよとみ温泉運動くらぶ』です。豊富温泉では、食事を出してもらえる宿が、今は3つしかないんですけど、その内の一つが、ユータン閣ホテルさん。今もここで、クラスをさせていただいている。今さっき、菅原さんからも話があったように、健康運動指導士の方が、今年度から豊富温泉のスタッフになったんですよね。この活動を始めた時にはいらっしゃらなかつたので、温泉に来た人が運動をする環境

をぜひ持ってもらいたいなと思っているので、今もこうして活動をしています。この記事は、北海道新聞さんに取り上げていただいたんですが、本当にたいしたことじゃない事でも、この地域ではすぐ新聞に取り上げてもらえたりする笑　たいしたことじゃないと言うと、ちょっと語弊があるかな笑　私、愛知の頃と同じような事を、今もやっているんです、ずっと。愛知の頃もヨガのインストラクターとして活動をしていたのと、あと、まちづくりのN P Oの理事とかをやりながら、とにかく、いろんな活動をしていたんです。それを今も、本当になぞるように、同じことをやっている。愛知では、どれだけメディアに取材してくれとお願いしても簡単には取材してくれなかつたのに、今では、向こうから記者さんが来てくれるという笑　本当にこの地域って、面白いなと思います。これが札幌とかだったら、そんな訳にはいかないんですけどね。これは、道北ならではの事。まさに開拓地というか、私など、入植したような気持ちです。

次です。ゴールデンウイークとお盆と、あとお正月ですね。年に3回は、集中講座として豊富温泉で毎日ヨガをしているんですが、結構人が来てくれます。多い時だと、一クラスで20から30名くらい。この写真は、ちょっと隙間があるときですけど、多い時はもっと、ぎゅうぎゅうになってマットが足りなくなったりするぐらいなんです。私が移住した頃は、ヨガのシェアはゼロだったと思います。そう思えば、ヨガって何？って言うところから「柔らかくないとできないんでしょ」って、それは今でも言われますけど。そう言われる中でも、とにかく続けてきたんですね、地道に。そして、だんだん受けてくださる方が増えてきたなというのが、今の印象です。この写真は、町です。豊富町の健康増進事業で、『とよとみスポーツCLUB』ということができました。今4年目になります。私が移住した頃は、月に1回程度の運動クラスがあるかないか、ぐらいで、稚内市の先生が宗谷各地を回っていました。豊富町には、固定した運動クラスがなかったです。こんな医療過疎の雪国で予防医学をしなかったら、人々はどうやって生きてくんんだろう？というのが最初の印象。とにかく、運動器の障害は運動で治すしかないと思いますしね。今、生活習慣病というのは、昔と違って食べ過ぎている。動かなさ過ぎて病気になっている人ばかり。昔は、栄養不足だったと思うんですけど。こんな時代の移動は、車ばかり。温泉街の中でも、みんな車で移動するんですよね。最初はビックリしました。

冗談みたいって最初は思っていたのに、慣れてくると、私も車で移動しちゃうんですよ笑　だから、そうなってきちゃうんですね。とにかく歩かない。私、愛知の頃はずっと、ほとんど電車とかで移動していたので、けっこうな荷物を結構持って、地下鉄を上がったり下がったり。だから、1万歩は余裕で歩いていました。1万歩歩いて、さらにヨガをしていたので、運動不足になることはなかった。休みには、山登りが趣味で山に登ったりもしていました。今では、車で移動しているだけです。山登りに行く時間もなかなかとれない。私に限らず、本当に運動不足の方が多いと思うんですよね。だから何とかして、このとよとみスポーツ CLUB のような取り組みを立ち上げていただきたいと思っていて。ずっと声を出していて、保健事業のほうで採用していただけたんです。

このスポーツCLUBの素晴らしい部分は、保健事業と生涯学習事業と子育て支援の事業をひっくるめて、連携事業になった事です。こんな取り組みは、縦割りの行政ではなかなか出来にく

い。予算が違うとか、主幹はどこだ?とか、最初はいろいろあったようです。でも最終的には、誰のための事業ですか?っていうところで折り合いがついて始まったのが、この事業です。私は行政側の人間ではないので、作った側ではないのですが、現場担当者のひとりとして、関わらせていただいている。

日々のクラスでは、一般の方をはじめ、子どもたちや親子さんを見せてもらったり。あと、65歳以上のシニアの方の椅子を使ってのクラスもあります。参加者は、多い時と少ない時といろいろありますが。産前産後クラスもありますよ。そう思うと豊富町には、町民全体、どの世代に向けても運動クラスがあるんです。産前産後ってさっき言いましたけど、そのクラスでは、子どもが1歳になるまではそのクラスで見ていて、大きくなったら、大きくなった子たちのクラスがあるんです。そんなにクラスの数は多くないですけど。多分このクラスバリエーションは、宗谷管内だけでは豊富町だけです。最近は、留萌管内にも呼んでいただきますけど、本当に運動クラスがないんですね。各地に来てもらいたいとすごく言っていただくのですが、行ってみると、ほとんどが女性や子ども。予算を付けてくださるのは、ほとんど男性なんです。それもあってか、なかなか採用されないのが現実ですけど。私一人を呼ぶくらいなら、それほどお金は掛からないですよ、医療や介護に比べたら、私を1人置くなんて。そう思って、いつも行政の方に言うんですけど、不思議なほどに高い壁です。健康が何より大事だと思うんですけどね。

次です。これは一つの結果というと、ちょっと違うんですけど。この記事は、北海道新聞の全道版に出ました。日頃、よくメディアには取材していただいたのですけど、なかなか全道版に出ることはないのです。が、去年の4月に介護保険、保険料が3年に1度更新されますが、豊富町の介護保険料が600円減額したということで、全道版の記事になりました。標津町と豊富町と2町が600円、最高額で減額したんですね。これはすごい取材が来たそうです。その要因は何ですか?と。茨城県の大学の先生や、研究者の人など。私も、何人かの方とお会いしたんですけど、その結論は、難しい。むしろ、大学で調べてください、というような出来事で。なぜかというと、この原因を追及しようと思ったら、65歳以上の人人がどれだけ転出していったかとか、その理由は何かとか、とにかく全部を調べないと分からないわけですよね。運動を少々したから安くなったとは、当然言えない訳です。ただ、そんな中で思うのは、町の方が元気になったよねって、すごく言われます。だからこれは、一つの要因にはなっているとは思うけど、数字をきちんと調べるのは難しい。それこそ、先生たちの分野です。大学の先生とか、研究者の方が。面白いと思いますよ。ぜひ調べてもらって、この理由を教えていただきたいなと思います笑

一つの事実として、今後の日本は、介護保険料がますます上がると思います、間違いなく。年金受給の年齢もどんどん上がると思うし、私がおばあちゃんになった頃は、受給年齢が85歳からとか、冗談みたいな本当の話というのが起り得ると思いますね。だって、生産世代がいないんですから。どうやって私たちは、年を重ねていけばいいんだろうって。だから、少しでも自分で生きる人を増やすしかないと思っているんです。自分の足で歩いて、自分でご飯を食べてくれる人を増やさないと。この地域は、さらに医療過疎ですのでね。そう思うと、すごく大事な活動だなと思っています。こういうことを話すときに、私はいつも、このスライドにあるように、『豊富

温泉の奇跡』という風に言っているんです。奇跡ってどういう意味だろう？と思って、ちょっと調べてみたんですよ。すると、『常識では起こるとは考えられないような不思議な出来事』って書いてあったんですけど、まさに、私がそうで。多分、この地域に移住している人はみんなそうだと思いますんですけど、特に豊富温泉をご縁に移住している人は、まさか、こんな最北端に住むと思ってなかっただろう、と。私は、出産してすごく肌の調子が悪くなりました。よくありますけど、ホルモンのバランスが悪くなつて、良くなる人もいるんですけど、私はものすごく悪くなつた。娘が1歳の時に最大に全身にアトピーが出て、どうしようもなくなった時に、豊富温泉をたまたま知ったんですよね。

それで、ここに来ることになったんですが、まさか、住むとも思わなかつた。本当に不思議だなつて。たまには、なんでこんなところにいるんだろうって、移住して1年目とかはよく思つていましたけど、本当にここは不思議な場所です。さっき菅原さんのスライドにもありましたが、移住者はそれぞれ、業種はバラバラなんですね。でも、共通しているのが、皮膚が弱いということです。私の故郷である愛知は、暑いんです。汗をかくのが辛くて。今現在私の肌は、温泉湯治は必要ありません。こういう涼しいところに生活する分には、もう特に温泉で湯治はしてないんです。でも、愛知に帰ると湿度が高いので、汗疹になるんですね。汗疹が痒くなつて、搔くとアトピーが出るという悪循環が起きる。今は、とても楽に過ごしています。なので、北海道の他の地域に住んでみたいな、というのも思つていますけど。涼しい場所がありますけど、寝たきりの苦しみからたつた6年後に、人の健康について考えているというのは、すごく面白いなと思って。もう、奇跡です。人生っていうのも変わるし、いつでも変えることができるし、自分の力で変わることもできるけど、変わってしまうこともありますね。だから、その時起つてしまつたことはしょうがないけども、私や他の移住者のように、自分で第二の人生を引きつけることもできる、ということですね。そういう意味で、今ここにいる自分が第二の人生でもあり、誰かの何かの役に立つたらいいな、とは思つています。

実は、5年前から父が首の骨を折りました、寝たきりなんですね。ずっとベッドの上にいる。それで、どうしたかと言つたら、FacebookなどのSNSを使用して、私はバカみたいに笑、あれこれ発信するようにしたのです。その一番の理由は、父が見つめているから。お父さんはどこも行けないので、いつも私の活動を見つめているわけですよ。そうすると、元気が出るというので。父と母は、私がこうやって離れてから、あれこれ忙しくしていますが、その活動を嬉しく思つてくれてゐるみたいなんです。そんな風に、さっき浅川先生が言つたように、何でもAmazonが届けてくれる時代。ウェブがあるからこそ、離れていても寂しくなく暮らせるというのもあります。出来ない事は出来ませんけど、出来ることを探しはじめたら、人生っていうのもできることがあるなと思っています。

そして。終わりに近付いてきました。健康づくりは『町のエンジン』だと思うんです。ここからは、田舎について、田舎と言うとちょっと失礼ですけど。こういう地域についての話に入ります。まず、もっと連携力を持つと良いと思っています。観光は観光、婚活は婚活、人材育成は人

材育成って、全部が縦です。温泉もそうなんすけど。これらを、健康づくりというテーマでつなぎ合わせていけないかな?と、いつも思うんです。様々な話を聞く中で、健康づくりって、どこにも出てこなかつたんですよね。

移住した頃から、温泉施設にいさせてもらうのもあるので、勉強会とかいっぱい可能な限り行かせてもらったり、いろんな方にお会いしました。でも、健康づくりの話題は全然出てこないんですね。豊富町は、10人議員さんがいらっしゃるけれど、すべて男性。豊富町役場の管理職で、女性はいらっしゃらない。移住したばかりの頃は、それが分からぬので「子育て支援の要望はどこに持っていくですか?」と聞いたら「そんなの持てないかな」なんて言われりして。住みにくい、生みにくいところに住めといつても無理だし、子どもが生まれなければ地域は広がらないし、子どもを産み育てやすい地域じゃないと、結局は残れないと思います。

この地域は高齢者が多いですが。もちろん高齢者も大事です。でも、女・子どもが住みやすい地域は絶対伸びると思うし、引っ越してくる方も多くなる。そういうところで上手くいっている自治体もある、実際。やっぱり、育てやすい地域であるというのはすごく大事だと思います。

そう思うと、学校がなくなるって、ホントに残念です。豊富温泉には、温泉小学校があったんですよ。7、8年前かな。今では豊富温泉の取り組みで、『アトピー留学』の制度を作りたいと様々な動きがありますけれど、今、それを一生懸命やっていますけど、たった7年前までは、温泉小学校があったんですよね。それが残っていなら、取り組み方は全然違ったんでしょうね。一度なくしてしまうと、もう取り返せない。子どもが減る中、全部の学校は残せないけど、やっぱり学校って地域の核だと思うので。そういうことを踏まえて、やっぱりつながり合わないと。ただでさえ小さな力をもっと小さくしてしまっては、と思います。

そんな中で、田舎と都会の違い。競合他社がいない。さっきブルーオーシャンの話があつたけど、まさにそのとおりです。私自身でいうと、ヨガの価値を分かっていただくのは大変であったけども、分かってもらうと他にはないので、シェアを広げやすい。が、責任が重いですね。他に先生がいないので。私しか先生がいないというのは、やっぱり重いですよ。あちこち呼ばれて良いですって言われるんですけど、やっぱり、難しいものあります。20代から80代まで一緒に見せていただいている。例えばその中に既往がある方もいらっしゃったりして、まあまあ大変です。でも、だからこそ、私自身すごく勉強になりました。愛知の頃は主にヨガスタジオについて、ヨガをしたい人ばかりの相手をしていたら、そりやあ楽だったなって今思います。もう今では、どういう方がクラスにいらっしゃろうと、『何とかします。できます!』と。それを育てていただいたのは、本当にこの地域なので、感謝しています。

日本全国、きっと運動インストラクターは余っていると思うんですよね。ヨガなんてもう人気商売なので、札幌とか旭川に行くと、いっぱいいる。『なかなか仕事がなくて』って、この間も旭川で話していた方が言っていたけれど、この地域に来ればいいのって思ったりして。ただやっぱり、ある程度のスキルがないと。ここで育ってインストラクターになるにはどうしたらいいだろう?って考えますね。私は都会で10年経験した。結構いろんな経験をして、スキルを持ってから、ここにきました。この地域は、場数を踏む場所がないんですよね。例えば都会だっ

たら、ホットヨガスタジオがあるんですよ。ホットヨガスタジオは、インストラクターの登竜門的な場所なんですね。そこでレッスンを、とにかくいっぱいやるんです、1日3本とか。だんだん上手になってくると、一般的な暑くない常温のスタジオでクラスを持ったりします。ホットヨガは、とにかく暑い場所でヨガをするので、汗をかきたくていらっしゃる方が多い。それもあって、インストラクターのスキルが見えにくいという部分があって。そういう風に、この地域でインストラクターになるのは大変だなって思うところがあります。だから、そういう意味では、都会で積めるようなスキルをうまく合わせていかないと。イチからここで頑張ってねっていうのは、ちょっと難しい。多分これは、インストラクターだけではないような気がしますね。伸び合いが生まれにくく、その結果、伸びにくい。そのままですけど。

そして、多分これは私がそうなんですけど、伸びようとしすぎると、浮く！私、すごく使いづらいタイプだと言われるんですが笑、まあそんなんでしょうね。私は、思うことを思うままに言っているだけなんですが。何事も、保守的であるとは思う。現状維持をしたいという想いを感じる事が多いです。がしかし、それを決して否定している訳でも非難している訳でもないんだけど、もっとこうすると良いんじゃないかなと思う、そうすると良いんじゃないんですかって、聞かれたらよく言っています。いわゆる田舎は、『ひとまず今の状態を守りたい』という雰囲気がすごくあるような感じがしています。そうすると結局、遅いと思うんです。現状維持は無理。人口構造も変わっていくし、この179ある北海道の自治体の中でも、やっぱり、目立っているところは、現状維持を目指していないから目立つ訳で。道北は、そういう意味ではとても素晴らしいところだから、さらにさらに伸びていくと良いなと思います。そう考える方が、もっと増えたら良いですね。いろんな意見を出せる環境が増えたらいいなと思っています。

ここでは、たとえきちんとノウハウがあっても、資金があっても、簡単に起業できない。豊富町には、不動産屋さんもないですし。だから、何かをやりたいと思ったって、物件すら借りられないんですよね。あの土地を買いたいといつても、全然誰の土地か分からなかったり。すごく探したあげく、結局分からないとか。そんな事が当たり前のようにあるんだけど、地元の建設業の方に聞くと、『あーあの土地ね、札幌の何々さんの土地だわ』って一瞬で分かったりする。地元に知り合いが増えて関係ができると、『買いたいなら聞いてやろうか？』なんて言われて、あっさりと進む。だから、本当に信頼関係が何よりも宝だなと思います。先ほど浅川先生も言っていたし、菅原さんも言っていましたけど、私もそう思います。人生最大の宝は、『出会い』だと思うんですよね。この地域って、出会いがとても貴重なんです。仲間もそうだし、本当に貴重。

私は愛知の頃、こんなに異業種の方と多数話したことは、きっとなかった。今日もそうですけど。やっぱり愛知だと、ヨガの関係ばかりになっちゃっていた。私はここで、日々、いろんな話を聞きますよ。そして、本当にこの地域は面白いなと思っています。

最後にあとひとつ。多面的に動ける力が必要だ、と。総合力で、想いは形になっていく。これも都会と大きく違うことがあって、先ほど菅原さんが言ってみたいに、人がいないので、チームがなかなかつくれない。私、ヨガのインストラクターなんんですけど、愛知の頃は、経理とか全部人に頼んでいました。ヨガをお伝えする以外は、全部を頼んでいました。私はヨガで役に立てば

いいと思っているので。NPOで活動している中でも、資料など作った事がなかったです。得意な人が他にいましたから。私の係は、プレゼンで話す事。補助金をいただくための申請書類とか、ちゃんと分かって作ってくれる人がいて、私がこういうことをやりたいからと言えば、書類にしてくれる人がいました。人がいるって言うのは、素晴らしい資源ですよね。だから私、ここに来たばかりの頃、出来ないことばかりでした汗。今では自分で確定申告もやるようになったんですけど、分からなくて最初は大変でし（笑）。

総合力というのは、人がいてこそもあると思います。だからここでは、結局自分でやるっていうことになるんですけど。田舎では、専門業すぎると困るというのはそういうところで、チームとして連携して何かを作りやすい都会では良いのだけど、ここだと、結局あれこれ出来るの方が強いかも知れない。たとえば私みたいな仕事もそうで、ある程度の総合力を持って、個人事業主として活動できるぐらいでないと。依頼をいただいて、やりとりをして、見積もりを送って、資料を作って。請求書を送るのも全部一人でやるので、そういうことができないと、結局ヨガをお伝えできないわけですね。だから私は、もっともっとヨガじゃない事をたくさん勉強しなきゃいけないって、この地域に来て思いました。今もそうです。ヨガの勉強は散々しているし、これからもしたいですが、もっと、地域がどうなっているのかなとか、例えばこうして、今日も大学の先生なんかとお会いできると、お聴きしたい事はたくさんあって。そういうことに今は興味があります。ヨガじゃない勉強をすると、不思議にこの地域で役立つと言う循環があるような気がします。

次です。こちらの写真のトヨさんは、今日のように話す機会をいただくと、いつも紹介しているのです。先ほどもお伝えしたように、人生最大の宝は出会いだと思っているのですが、トヨさんに限らずです。運動を始めた事で、元気に強くなった豊富町のおばあちゃんたち。トヨさんが初めてクラスに来てくださったのは、80歳だったかな。運動クラスに初めて参加したのも、80歳と言う。人は老いていく。老いていくのは仕方ないのだと、痛みも病気も仕方がないと諦めていたそうです。でも、自分の力で歩く寿命を延ばせるという事を、クラスで知ったと言われるんです。80歳で。それから、週に2回ぐらい90分のクラスに参加されるようになって。トヨさん、もう90度腰が曲がっていたけど、今はこれぐらい立つようになったかな。健診で、身長が5センチ以上伸びていた。って。伸びてないですよ、姿勢がよくなっただけど。強く曲がった腰が起こせるようになったので、身長計に背中がつくようになった。看護師さんが「あ、間違えていますね」って、去年の数字を観て測り直すくらい、姿勢が良くなっただんです。周りからは、背が高くなつた高くなつたと言われて、それがまたうれしくて、頑張る。でも、今はさすがに。すごい変形性の膝なんですね。これはもう、なかなか止められないんですね、難しい。重力があるこの地球においては、長く生きているといろいろ弊害も出てくる。とにかく、なるべく筋肉を痩せさせないため、今も家で動いてくれています。グループレッスンには、今は参加しにくくなつたので、たまにこうやって家に会いに行くんですよね。今でも自分のペースで、家で毎日1時間も運動をしているんですよ。一生必ず自分の足で歩くと、今でも言っています。一生元気で生きるからって。『先生がここにいる内は私生きるから』なんて言ってくださるから。『また会いに来るか

ら、ずっと生きててよ』って、いつも話すんです。

人には、生きることを生かす力が必要だと思うんですよね。弱くなると、生きながらえちゃうんですよ。人は諦めると。ただ命が続いているだけ、という。私は、生きることを生かそうとする役割だと思うんです。健康づくりの役割。だから、何とでも交わることができるし、生きる意欲が湧いて、ヤル気になって、観光に関する何かをやってもいいじゃないですか。生きる意欲が湧いて、ヤル気になって、結婚してもいいじゃないですか。とにかく、ヤル氣がないと何も生まれないので。生きる事を生かすって、大事です。世の中に生きている人はいっぱいいるんだけど、ただ生きるのではなくて、生き生きと生きるということが、すごく大事。ここはとくに、こんな寒い地域なので。生きる事を生かし合って、生き生きと生きる人が増える取り組みをぜひこれからも続けたい。そういう原動力に、私はなりたいです。それが私の健康づくりっていう本業の力だと思っています。

最後です。私にとって豊富町は、第二の故郷です。さっき菅原さんが言っていた通りなんですが、私は、本当にここに来たくて来たんですね。豊富温泉という温泉が、未来永劫残ってほしい。そう思うと、豊富町を残す必要がある。宗谷管内を残す必要がある。JR宗谷本線もそうですが、空港もそうだけども。素晴らしい温泉があっても、そこまで行けなくなっちゃうということが、あり得ますよね。人がいなくなると、いくら資源はあったって、それを維持管理する人もいなくなってしまう。ここの地域の主力は1次産業だから。とても大変。一次産業の現場は、どんどん人が減ってしまうと思うんですよね。だから、どうしたら残すことができるのかなっていういつも思います。私は、健康づくりという側面からお役に立ちたいと思っていますが、何もかも、とにかく広域でやらないと、と思います。豊富町は豊富町、稚内市は稚内市なんて言わないで。例えば、ゴミ処理は広域でやってんです。『ゴミが出来たなら他でも出来ますよ』って、いつも私は思うんです。例えば道北に観光に来て、1週間豊富町には居ないと思う。猿払村に行って、豊富町に行って、天塩町に行って、幌延町に行って。道北各地を回れたら、すごく面白い観光だと思います。でも、なかなか形にするのは難しいようです。でも、絶対ゴミができたのだから、出来ると思います。

最後のスライドです。これが私の活動テーマでこれをずっとやっているんですけど、『医療過疎地にこそ予防医学の普及を』です。ドクターへリが飛ばなかったら、助からない命がここにはありますね。もし旭川市に住んでいたら、多分この人は助かった、と。でも、この地域だったら助からない。それは、ここにいる私たちもそうですよ。ある日突然、バタンと倒れるかもしれない。その時、天候が悪くてへリが飛ばなかったら、もうその命はないかも知れませんし、大きな後遺症が残るかもしれない。だから結局は、健康だと思うんですよ、全てのエンジンは。健康であるから良い仕事ができるし、良い活動ができるし、移動が出来たりもする訳ですからね。

なので、ぜひ、皆さんも生活習慣病には気を付けて、たまにはヨガなんかやっていただけたら、とてもうれしいなと思います。以上です。ありがとうございました。



健康運動指導士
中島 まなみ

(まなん。)

- 昭和 50 年 12 月 4 日生まれ 43 歳
- 愛知県瀬戸市出身
- 豊富町へ移住 6 年目



沖ヨガ

～日本伝統のヨガ～

- 沖正弘 (1921~1985)
- 別名『生活ヨガ』
　　インド古典ヨガ、日本伝統文化、武道、東洋医学、民間療法等を組みあわせて体系化したヨガ
- 日本人の体質に合わせたヨガ



瀬戸市

せとし
日本の市

瀬戸市は、愛知県にある市。 [ウィキペディア](#)

面積： 111.4 km²

現在の天気： 温度: 19°C、風向: 南、風速: 3 m/s、湿度: 73%

現地時間： 21:08 (土曜日)

旅行の計画を立てる

[瀬戸市の旅行ガイド](#)

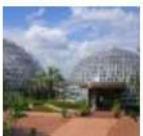
3つ星ホテルの平均料金は ¥8,435です

1 h 45 minのフライト (料金 ¥10,100～)。

ランドマーク



愛・地球博
記念公園



東谷山フル
ーツパーク



岩屋堂公園



サツキとメ
イの家



東谷山

他 15 件以上を表示



豊富町

とよとみちょう
北海道の町

豊富町は、北海道宗谷総合振興局管内の日本海側に位置する町である。利尻礼文サロベツ国立公園の一部であるサロベツ原野が広がり、日本最北の温泉郷「豊富温泉」が有名である。 [ウィキペディア](#)

面積： 520.7 km²

現在の天気： 温度: 6°C、風向: 北、風速: 0 m/s、湿度: 86%

ホテル： 3つ星の平均料金は ¥12,241です。 [ホテルを表示](#)

人口： 4054 (2016年9月30日)

地区： 天塩郡

現地時間： 21:07 (土曜日)

ランドマーク

他 3 件以上を表示



サロベツ湿
原センター



サロベツ展
望台



兜沼公園



豊富温泉自
然観察館



サロベツ原
野

豊富町は瀬戸市の約4倍の広さ
でも、人口は32分の1(牛は人間の約4倍)





●今日の3つのワード

『豊富温泉』の奇跡

『健康』と言う財産

『田舎』と『都会』の違い



豊富温泉でヨガ 『とよとみ温泉 運動クラブ』

●ニュー温泉閣ホテル

●月、金曜日
 午後2時～3時半

●参加費800円～1,000円
 (湯治客、豊富町民、近隣市町村民)

●2018年4月27日（金）北海道新聞 留萌宗谷版

【豊富】豊富温泉での湯治をきっかけに町内に移住した住民でつくる「豊富温泉もりあげ隊」が、ヨガやストレッチを教える「どよとみ温泉運動くらぶ」を今月、立ち上げた。主な対象は湯治療養の人だが、一般参加も歓迎する。

「くらぶ」は毎週月、金の2回、午後2時から同3時15分、「ニュー温泉閣ホテル」で行う。講師は地元のヨガインストラクター、中島まなみさんら3人がヨガ、専用のポールを使ったストレッチ「ストレッヂボール」、専用の布を用いるストレッチ「ストレッヂ」を指導する。定員は15人で、参加費は1回千円。当日に同ホテルで買い物や

入浴で500円以上の人には200円割り引く。中島さんが4年前からの健康運動指導士として講師を務めていた町営入浴施設ふれあいセンターでのヨガ教室が昨年で終了。生徒から継続の要望が多く、くらぶを発足させた。

中島さんによると、皮膚疾患で湯治する人は汗をかくと、かゆくなるのを嫌がり運動しない人が多いといふ。アトピーに苦しみ豊富に移住した中島さんは「運動で体力を付けて免疫力や抵抗力を付けた方がいい。皮膚疾患で悩む人が運動できる環境を継続させたかった」と語る。問い合わせは中島さん☎090・1983・4321へ。（福田講平）

湯治客 ヨガで応援

豊富温泉 移住者がクラブ発足



今月発足した「運動くらぶ」
（中央）ライインストラクター

稚内市
石橋 恵先生

天塩町
河上 耕希先生



豊富温泉もりあげ隊presents

ゴールデンウィーク！

GWヨガ集中講座★

毎年恒例の集中講座です。

今年度は5日間集中、毎日ヨガを続けると感じられる心身の変化を、ぜひ味わってみてくださいね！

日 に ち 2018年4月30日(月)～5月4日 (金)

時 間 AM10:30～正午

場 所 豊富温泉『ニュー温泉閣ホテル』

参 加 費 800円 (当日、温泉閣で500円以上使われた方は500円)

定 員 15名 (温泉閣フロントにある予約票にお名前をご記入ください)

講 師 中島まなみ (まなみん。)

<お問合せ・ご予約>

豊富温泉もりあげ隊 担当 中島 ☎090-1983-4321

※当日定員にゆとりがあればご参加いただけます。お気軽にお問合せください。

当日の場合 ニュー温泉閣ホテル ☎0162-82-1243



●4月30日(水)のクラス風景



けんこう
運動で「健幸」なココロとカラダを



健康増進事業

とよとみ スポーツ CLUB

参加者募集中！

運動不足解消・足腰のおとろえ・ストレス発散など
あなたの目的に合った様々な運動が楽しめます！

年齢や性別に応じた、各種クラスをご用意
老若男女、みなさまの参加をお待ちしております！

各クラスは事前にお申し込みが必要です。まずはお電話ください！

お問い合わせ・お申し込み

豊富町保健センター TEL 82-3761
子育て支援センター TEL 82-3588

豊富町ホームページでも
各クラスの内容をご案内しております！
こちらのQRコードからアクセスできます→



豊富町教育委員会 TEL 82-1355
豊富温泉コンシェルジュスク TEL 82-3782

豊富町の健康増進事業

『とよとみ スポーツCLUB』



- 椅子エクササイズ
- ヨガ
- バランスボール
- リズムボクシング
- ナイトウォーキング
- フロアアーリング

●おやこ元気ヨガ@豊富町子育て支援センター



●とよとみスポーツCLUB『元気体操スクール』



豊富温泉の奇跡

～トヨトミオンセンノキセキ～

● きせき（奇跡・奇蹟）

常識では起こるとは考えられないような、不思議な出来事。特に、神などが示す思いがけない力の働き。また、それが起った場所。

たった6年前には寝たきり、
日常生活もままならなかつた私が、

今では、

『他人様の健康』
について考えている。

人生はいくらでも変わる。
いつでも変わる。
変えるコトだって出来る。

健康づくりは 『町のエンジン』

- もっと『連携力』を！！
観光、婚活、人材育成、温泉振興。
これらを『健康づくり』というテーマでつなぎ合
わせてゆく。
そこで生まれる無限の可能性を模索してゆけないか？

田舎と都会の違い

- 競合他社がおらず肩がぶつかる機会が少ない。
→シェアを広げやすいが責任が重い。
一度の失敗がかなり尾を引く。
- 伸び合いが生まれにくく、その結果、伸びにくい。
伸びようとし過ぎると、浮く。
→現状維持は衰退の一途、すでに遅いとすら思う。
- 資金とノウハウがあっても企業出来ない。
→信頼関係が何よりの宝。
- 『多面的』に動けるチカラが必要。
→『総合力』で想いはカタチになってゆく。



宮田トヨさん 84歳

- 一生自分の脚で歩く！
 - 毎日1時間運動する！
 - 一生元気で生きる！
- 生きるコトを生かす
チカラを。

第二の故郷である豊富町。
私はここで、**第二の人生**を取り戻す事が出来ました。

このご恩をお返しすべく、
『宗谷の健康づくり』でお役に立ちたいと思います。

『医療過疎地にこそ予防医学の普及を！』

ご清聴ありがとうございました！

(5) 総合討論



- ・セミナー会場となった「きた北海道移住支援型シェアハウス・キックスタート！」（左）
- ・報告と総合討論の間の休憩時間には「キックスタート！」の見学会も行いました（右）

司会 清水池 義治

これから、ディスカッションを行います。今日は参加者もこれぐらいですので、ざっくばらんに皆さんでお話しできればと思います。浅川先生と菅原さん、まなみんさんにそれぞれお話をさせていただきました。ご専門とされていることはそれぞれ異なりますが、異なる視点から移住を見た場合にかなり共通する点もあるなと聞いていて思いました。最初に、それぞれお話しになられた内容に関して、何かご質問、コメント等あればいただきたいと思うんですけども、いかがでしょうか。

豊富町からいらっしゃった尾崎さん、いかがでしょうか。

尾崎 滋（豊富町商工観光課ふれあいセンター管理係）

はい。豊富町の温泉ふれあいセンターから来ました、尾崎です。先ほどもちょっとまなみんのほうからもお話がありましたが、私も移住者で静岡県から移住ってきて、今8年目になります。今日は、貴重なお話ありがとうございました。先日もちょっとこちらに移住していた仲間がいまして、その彼がゲストハウスをもともとやりたいといって豊富でやろうとしていたんですけど、結局できなくて諦めて、ほかの和歌山でゲストハウスを今、友人がやっていたゲストハウスを継いでやっているということで、先日ちょっと実家に帰るついでにその彼のところに行ってきてそこを見てきた後だったので、非常に見たら、すごくきれいに改修されてて素晴らしいなと思いました。その彼のところは、もうぼろぼろでごみだらけみたいなところを改修して自分でやっていたので、すごくここに泊まれるんだつたらいいなと。本当に古民家みたいなところを借りてというような感じでやられていて、ここ本当に広いですし、そうですよね。

実際にこの辺に来られる方で、もし移住体験となると、どういうふうな形で、どういう方をターゲットにというのがちょっと気になります。例えばその彼のところは、熊野古道を歩くために外国人が

たくさん来るところだったので、そこで実際に海外の方もたくさん来てそういう方を受け入れるという形だったんですけど、実際に稚内に来られた方で移住支援っていうのを検討されている方をどうつながりで拾うのかなというのは、ちょっと今のお話でも、選ぶっていう前に、どうその人を拾つてくるのかなというのがちょっとまだ今のお話の中では見えなかつたので、聞かせていただければ。

司会

ありがとうございます。非常に重要な指摘だと思います。

浅川

極めて本質的なご指摘かと。ちょっと今日の資料では説明をはしおちやつたのですが、この中に最北移住塾第2期というのがあって、これがまた最近考えた仕掛けで、単に移住支援型といって開けていても、確かに誰も来ないよなというので、こういう移住塾という形で2泊3日のプログラムをつくっておりまして、1日目が私の講義、2日目が1日中この辺を見てもらうので、3日目が村木さんの講義ということで、一応この内部で全て完結するというのをつくってみました。これも申込者ゼロなのですけれども。こういう形で仕掛けをいろいろ考えてはいるんですけども、ちょっと私の力量不足もあってうまくいっていないなというところもあります。

稚内の魅力って何だろうかというと、これは僕も村木さんも本当に意見が合うところですけど、暑さに弱いんです。そこはすごく重要で、とにかくたぶん日本で夏が一番ここは涼しいんじゃないかなと思うんですけども、涼しいというところと、あとはやっぱり僕は人口密度が高いところ大嫌いなので、こういう人口密度が低いというところで、夜中、本当に1台もすれ違わないオロロンラインとかを走ると、シカの危険性を除いては、結構好きなんです。真っ黒な中を。

あとやっぱり小さいところなので、人のご縁があつたり、濃密なというか、先ほど村木さんから説明あったかと思うんですけども、この改修作業でこちらから正面切ってお願ひした業者さんはゼロで、全部村木さん関係の、村木さんのビジネスパートナーの知り合いで、全部いろんな作業をお願いしました。電気の配線もそうですし、上のフローリングの改修もそうですし、その他ストーブだとか家具だとかというのも全部人づてでやりました。ある意味そういうネットワークがあれば、できてしまう。結構大掛かりな改修だったんですけども、実質3ヶ月とか4ヶ月とかなのですよ。

4ヶ月であれだけのことできてしまったというので、なかなかすごく面白いなということで、やっぱりそういうところに価値を見いだす人が少ないながらもいるんじゃないかなということで、狭いながらも深いというのを目指してはいるんですけども、なかなかそこもうまくいってないところもあるんですけども、そこはちょっと手探りでやっていきたいなというところです。ちょっと私最近SNSを頑張っていますので、QRコードも配っていますのでTwitterとかでフォローしていただければありがとうございます。すいません、あまりお答えになってないのですが、模索中というのが正直なところなのですが、われわれと同じようなそういう考え方というか、暑いの嫌だととか、都会が嫌だととかいう人に最初に、最初じゃなくてもいいんですけど、そういうきっかけになればいいなという思いで今い

いろいろ考へているところです。

司会

ありがとうございます。今の点と関わりますが、スキルのある専門職の求人倍率が5倍ぐらい極端に高いってお話もありました。そういう方にいかにそのスキルを生かして来ていただけるかというのも重要という話があったと思います。そう考えると、地域にとって来てほしい人は、専門職である場合が多いでしょう。

例えば、私が以前に働いていた名寄市立大学は保健福祉系の専門職の養成校でした。看護師、保健師、社会福祉士、あと管理栄養士、あと保育士等々を輩出しているんですが、やはり大学としても、地元、地元といつても結構広く考へていますけども、最大で道内、狭く考へると道北地域っていう感じですが、地元にぜひ就職してほしいと考えています。実際に就職する学生も多いんですが、その一方で都会志向の学生も多くて、どうせなら札幌に行きたいとか、あるいは東京へ行きたいという学生もいます。とすると、やはり例えばこの地域でいうと、例えば名寄市立大学や旭川等々の専門職の大学生もターゲット層としてもあるのかなと思いますし、稚内北星学園大学の学生は、結構地元に就職する割合が高いと聞いています。

移住を考へる際に、特定の来ていただきたいターゲット層にどうやってアクセスしていくという、そういうアプローチも必要になるのかなというふうにも思いますし、都会に出ていてやっぱり帰つてくるというような動きで戻つてくる人は結構多いですね。私も名寄に住んでいたときに、一回出て戻つてくるという人は非常に多かったです。ですから、都会に出て、やっぱり地元に近いところで働きたいと思う方が多いそうで、そういうUターン層をいかにちゃんと拾えるかというのも非常に重要な課題かなと思いました。

秋山 隆太朗（北海道大学大学院農学院修士課程 / 道北の地域振興を考える研究会 事務局員）

ちょっと寒いので、上着を着たままで申し訳ない。先生のちょっと勉強をさせていただいております、秋山と申します。どうぞよろしくお願ひします。

一つ目は、こういった施設を開くに当たって、やっぱりコスト、建設のコスト、建設というか、ここは改裝すけれども、あとそれを維持するコストが必ず掛かるといえば掛かりますけども、先ほど先生、本業をやってらっしゃるので、こうした値段だけでも、回していくといったことをおっしゃってまして。実際どれくらいのコストが掛かって、どれくらいの何というんでしょうか。というのも、これをもし同じようなことをしたいというふうなことを考えたときに、やはり、必ずしも思った職業はないけども、こういうのをやってみたいという人がいたり、実際この事業だけをどう考えるかというふうに考えたとき、そこら辺がどうなのか無性に気になってきました、もしできましたら。

というのは、あともう一つ、季節移住という生活スタイルのことなんですが、それはちょっとすごく気になってまして、私自身が気になるというより、いろんな人たちのいろんな話を聞いてきて思つてのことなんんですけども、例えばそれこそ先生はオーストラリアに3年いらっしゃったこともある

ということで、私の友人のおじいさまとかが、夏の間はこちらにいて、冬の間はオーストラリアに住むというような生活をしてて、それもある意味季節移住なのかなというふうに思うんですけども、そういう生活スタイルって、1カ所に住むより必ずコストも掛かりますし、移動があったり、仕事に関する不自由さとかも出ると思うんですけど、それってやっぱり必ずしも。先生方は、暑さに弱いからという、その理由だけではなかなかできることではないと思うんですけど。仕事とかで支障とか、実際継続的なコストだけじゃなくて、やっぱり大変さというのがあると思うんですけども、実際そういったものっていかがでしょうか。ちょっと聞いてみたい。

司会

ありがとうございます。われわれ経済学をやっている立場からすると、どうしてもその辺が気になりますね。お願いします。

浅川

実際のコストに関しては、ちょっとこういう場では。ちょっと今日飲みながら。そろばんはじいたこともあるので、それもちょっと飲みながら。具体的な額は、この場ではあえて言いませんけど、土地建物を買う費用よりも改修コストのほうが掛かりました。ある程度予想していたんですけど、次から次へと村木さんが、あれも、はい、請求来ましたと。なかなかそこは結構想定外だったんですけども、でも、やる限りは絶対妥協せずやるということです。

二つ目の点、ありがとうございます。もともとの経緯を言いますと、2016年にたまたまそのとき仕事で行き詰まっていたりとかいろいろあって、稚内にはもともと何回も旅行で来ていたので、好きだったんですけど、「稚内 移住」で検索したんです。そうしたら、市の移住体験住宅が一番上にヒットしました。今住んでいる下勇知の僕の住んでいる家の道路の向かい側、旧教員住宅が移住体験住宅で、牧草地の写真もあって、これだ！と思って申し込んで行ったら、すごくよくてですね。そこに1週間いました。次の年の8月に2週間いて、そこでたまたま職員の方と話をしていて「安く借りられる一軒家ないですかね」と言ったら「今住んでいる一軒家が空いているよ」とのことでした。そこも2017年6月まで移住者の方がパン屋さんをやってところです。ちょうど出たところだというので、だったらそこでということで。そっちの家賃は安いですよ。月1万8000円、一軒家が。ただ、水道光熱費なので、そっちは大したことないですよ。旅費と航空券代やレンタカ一代は結構掛かるんですけども、コストはコストなのですけど。

大変さですよね。冬の除雪がちょっと大変ですよね。ずっといないので、しばらくこちらにいないで戻ってくると、雪が山盛りになっているので、そこはちょっと便利屋の村木さんにお願いして、何月何日に来るからって、ちょっと雪どけてくださいというのでやって、それはそんなに大変じゃないです。むしろ飛行機の欠航がないことを祈ることのほうが大変かなという気もします。

あと大学の教員なので、基本メールでやる仕事がかなり多いので、こっちに来てもちゃんとメール対応さえしていれば、特に問題はない。会議の合間を縫ってこっちに来たりとかしていますね。ただ、

下勇知の電波がちょっと弱いので、そこはちょっと。仕方ないといえば仕方ないんですけど。二地域居住自体のつらいとか、大変というのは特にないです。むしろずっと名古屋にいるとちょっと気が狂いそうになるので、こっちに来てこういう景色を、今、西に見えていますけれども、というのを見ると癒やされるというか、一種いったんリセットされてこっちに来るというので、やってみるとすごく楽しいなというか、2分の1ずつじゃなくて、両方とも1、1かなという感じで、2倍か3倍かぐらい楽しいかなという感じですね。

ですので、私にはつらい点は特にありません。もちろんコスト面は掛かりますよ。旅費とか航空券とか家自体の家賃だとか水道光熱費も一応払いますけれども、すごく楽しくやっています。ただ、聞いたところによると、市内に行けば賃貸アパート結構高いらしいので、一軒屋がそういう破格な値段で住めて、しかも私もどうせ稚内市に住むんだったら、下勇知とかみたいな牧草地帯、ああいうところに住んでみたかったので、僕としてはすごく理想的な生活をすごく楽しんでいるというところです。

司会

ありがとうございます。私から、菅原さんと中島まなみさんにお聞きしたいことがあります。この宗谷地域で、移住者に関するネットワークなど、そういうヨコの関係性のようなものって元からあるんですか。

菅原 英人

私地域おこし協力隊で移住してきて、先ほどのお話の中で、稚内市ってまだやってなくて、豊富町が今年度からスタートして、それ以外の宗谷管内でいうと、浜頓別、利尻、礼文、中頓別は協力隊がいます。あと枝幸町もあります。あと留萌管内というのは、かなり早い段階から全部の市町村で協力隊受け入れやっているんですよね。あと天塩川流域の軸で見ても、全市町村が地域おこし協力隊をやっていますね。そういう中で、せっかく地域おこし協力隊っていう同じような境遇でほかから移住してきた集まりがあり、そのつながりで何かやりましょうという方がいました。その方は、士別市の協力隊の女子だったので「道北面白人間ネットワーク」っていうのを立ち上げて、SNSのコミュニティーで60人、70人ぐらいがつながっていた。それは協力隊だけに限らず、ほかの協力隊でなくて移住してきた人、地元の人、前向きな人とか、話しやすい人みたいな感じのつながりを持って活動をしていました。定期的に集まって何かイベントをやったりというのを2年ぐらいやっていたと思います。その協力隊のリーダー的な女子の方が協力隊の任期が終わった後に、ちょっといろいろ事情があって残らず、地元に帰ってしまって、その後は、活動はやってないんですけど、つながりは残った。あと、協力隊であるということで、いろいろな人と知り合う機会というのは結構、多いです。ただ、一つちょっとネックというか、協力隊活動の給与分と活動経費というのが全部国から出て、自治体が募集をして採用と、運用してという感じなのですが、自治体によってたぶん温度差があるので。自治体によっては、行政区画、自分の町から一歩も出て活動してはダメみたいなところも結構あって、そういうのがあるので、なかなか横のつながりというのがちょっと難しい町なんかもあったり

するのですよ、いまだに。そういう中でも結構協力隊は、横のつながりでいろいろつながりを持っていて。あと道北地域の協力隊メンバーを中心になっている「きた北海道協力隊ネットワーク（KKN）」という、そういう組織があって、今、士別の協力隊がその代表をやっているんですけども、そのつながりの中で四、五十人ぐらいメンバー募って定期的にちょっと勉強会をやりましょうというようなことはやっていますね。

司会

それっていうと、一定の水平的なつながりがあるという。

菅原

はい。

司会

特にちょっと先ほどの話を聞いていて思いましたけど、豊富温泉が共通項としてあるから、それは地域おこし協力隊以外の方も、あるいは湯治目的でいらっしゃった方と、よりつながりやすい素地がもともとあるという、そういうことになりますが、そういう理解でよろしいでしょうか。

菅原

はい。

司会

私が住んでいた名寄市の隣に下川町があります。下川町はたくさん移住者の方がいらっしゃって、豊富町もそうだと思うんですけど、移住者がたくさんいると移住者が移住者を呼ぶという関係になって人がいっぱい集まりやすい側面はあると思うんですが、確かにそれを見ると、水平的な移住者同士のネットワークというのは非常に結構強いものがあると思います。ただ、問題なのは、その移住者の方とそこに元からいらっしゃる地域住民との関係性をどう築くかは結構難しい問題で、下川町でもその辺が問題になることが多いというような話も伺ったりしています。その辺の難しさはやはりありますでしょうか。

菅原

そうですね。おっしゃるように、協力隊同士は同じ移住者という境遇なので、豊富温泉の移住滞在者もそうなんですけど、横のつながりって比較的築きやすいのかなというのは、すごくあります。ただ、その中で、人によるんですけども、地元の中でもつながれる人もいるし、全然本当に仲良くなつて、いろいろな面でお互いに支援を受けたり、支援したりというような関係性を築いているというのは少なからずあるのかなというふうに思います。まなみさんは何か。どう思います？

中島 まなみ

本当にそうですよね。私は仕事がこうなので。

司会

そうですね。

中島

私が豊富温泉に移住した6年前にまず思ったのは、豊富温泉と豊富町って6kmほど離れているんですけど、気持ち的には、60kmぐらい離れているように思つたんですよ。湯治療養で来ていた時には、豊富町の中心部に買い物に行つたり、移住する前の年には、2カ月間、町の中心部に住んだりもしたんですけど。結局は、移住者同士のつながりのみで、湯治療養者同士で盛り上がり上がつていただけ。町の人と会うことがほとんどなかつたです。

でも、温泉に移住して、いきなり5人の若い世代が移住したので、話題にもなつたんですよね。だって、衰退の一途を辿つているような地区ですから。温泉って、確かに今は盛り上がりがついているように見えますけど、住んでいらっしゃる住民は高齢化で、冬は施設に入つたり、自力で住めないぐらいの方もいらっしゃって。回覧板を回すのも大変だ、とか。どこでも、小さな地区はそうだと思うんですけどね。

そんな中で、移住してまずやりたいと思ったのは、どんどん町に出ること。町の人と出会いたい！と。最初は、『豊富温泉もりあげ隊』というのを作つて、そこに座つてゐる尾崎君も一緒に活動していましたよね。そのきっかけは、豊富温泉をもっと盛り上げたかったから。そのままですが、盛り上げたいから『もりあげ隊』って名付けたんです。

町でいきなりイベントを開催したり（笑）。そして、カフェをやりたいねってなつて、豊富温泉で。カフェって誰でも来るし、そこで湯治の人と町の人とが出会えたりもする。面白いなつて。そして、結果的にですが、自分が担当させてもらつてゐる町の中心部のクラスの中でも、それが起つています。湯治に來てる人と町の人とが出会う場になつてゐる。今ではもう、何か『素地』ができるよう気がしますね。「あんたどつから來たの？」って、自然に話しかけてもらう、そんな環境が今はあります。そこで家に遊びに行って仲良くなつて、なんて事も生まれています。そのためのきっかけが、やっぱり必要だと思いますよね。

あと、私自身の反省点ですが。外から來た私たちにとっては、見た事があり聞いた事があることをこの場所で実現したいと思うんだけど、この地域の人にとっては、見た事も聞いた事もないんですね。その、見た事もない、聞いた事もないことを、さあいきなりやろうよと言われても、よく分からぬ。経験がある人とない人。これはとても違つ。だから、スピード感を求めるのが私の大失敗だったなつて、振り返つてみて反省している部分なのです。だから、だんだん馴染んでゆくものなんだと思いますよね。都会と田舎の明らかな違いは、スピード感だと思うので。それを求め過ぎると、

私のように上手くいかなくなる。でもそれでも、上手くいかなかった事がいろいろあったけど、助けられたのもまた、地元の方々だったんですね。だからそうやって、お互いや歩み寄る気持ちがなきや、そもそも無理で。なので、地元の方にも歩み寄ってほしいし、私たち移住者も、いきなりわーっ！て持って行くのではなくって、ちょっとずつ伝えて理解を求める、という風にしていかなきや駄目だよな、と思う。

協力隊の方とお会いする機会も結構あります、話を聴くと、すごくビジョンを持ってらっしゃる方が多い。こんなことをやりたいんです、と。それが素晴らしいからこそ、焦らないようにゆっくりやると良いと思いますよ、という話はよくします。

司会

ありがとうございます。

Aさん（※お名前が不明でしたのでこのように表記しています）

稚内市在住です。実は、夏はこちで二重生活を今はしています。大体春先に来て、夏の間こちらにいて、もうすぐ帰るんですけど、6ヶ月ぐらいこっちにいます。ただ、私は移住の何かを使うとか、そういうのじゃなくて、たまたま娘が住んでいたので、遊びに行ったら、もう本当に素晴らしいところで、もうそしたら土地がいっぱい空いているしというんで、結局家を買ってそこに住んでしまって、もうそろそろ10年近くになるんですね。だけど、中の人たちはもうみんな仲がいいんですよ。だいぶ知り合いも増えたんですけど、あとこの新聞見たら、そういう移住の何かがあるということで、やっぱり移住されて来た方たちとか、そういう集まりとか、何かそういうのがあったらいいなと思って、今日は何かそういうような情報があるかなと思って参加させていただいたんですけど。

本当に素晴らしいところだし、向こうの内地とかの人はまったく違うし、本当に感動。私たちもこちらにずっとといたいんですけど、やっぱり冬はとても無理でもう年齢が年齢ですので、本当に夏の間だけこちらにいて冬は帰るわけね。でも、本当に素晴らしいと思っているので、いろんな方と、こちらの方と友だちになりたいし、そういう会があれば、参加したいなと思って今日は参加させて。ぜひつくっていただきたいと思います。

司会

そういう移住者の水平的なつながりというのがあるんですかね。

Aさん

そうですよね。まったくそういう関係がないので。

司会

移住者に関して、稚内市とか、あるいは周辺市町村の統計みたいなものって何かあるんですか。

菅原

たぶん各自治体毎と、あと振興局毎にそういう情報は、たぶん役場でいうところの総務課の企画係とかが担当していると思うんですけど、たぶんその辺の情報って周辺でも共有できない、全くできないと思います。天塩町は、留萌振興局管内って、稚内とくくりが違っていたりなんかしていて、そこの情報共有というのは全然できてないのが実態ですね。

司会

ちなみに、住民票というのはどういう扱いになっていますか。

Aさん

移してないです。

司会

そうすると、たぶんそういう方がどの程度いらっしゃるか分からぬということになりますね。地元の人には聞けば分かるけど、行政としてはあまりよく把握できない。

Aさん

一応自治会には入っているから、地元の中では回覧とか、自治会、ごみ拾いなどの活動とか、そういったのには参加させてもらっているんですけど、稚内市の住民票がないので、そういうあれには把握していない。

司会

結構そういう方って多いですか。

Aさん

私この間スーパーでたまたまちょっと買い物をしていたら、こっちの魚を見ていたら、稚内の方と話をした機会があったんですね。私、夏だけこっちに来ていると言ったら「そういう人たくさんいますよ」ってその方、言ってらしたんですよ。だから、結構いらっしゃるのかなと思ったんですけどね。

司会

そういう実態って、なかなか把握するのは難しいですよね。

菅原

やろうと思えばできます。

司会

できるんですか。

菅原

やる気の問題。

中島

それが難しいんですよ。

深谷 るみ

私、深谷と申します。実は、稚内出身で40年間東京のほうにおりまして、今年の春にまた戻ってきたんですが、住民票は実はちょっと諸事情あります、まだ向こうにいるんですけども、浅川さんが嫌いな民泊をやろうとしています。

浅川

違う。民泊じゃなく、規制が嫌いなんです。

深谷

民泊の規制というのは、実は大都会向けにつくった旅館業法適用のあれでして、結局大きなところで適用しているものがこの地方にぴったり合うかというと、実はそうではないんですね。やっぱり大きいところには、大きいところの法律があり、小さいこういった田舎には、田舎に適用するようなものが実はあってしかるべきだとは思っているんですけど、なかなかそれがいかないというのが日本の今の現状だと思うんです。実は、私ホテルの経験しておりますし、介護保険関係ではケアマネジャーの資格も持っているんですね。ずっとやっておりまして、向こうで施設なんかも運営していたというのもあって、福祉のほうとそれからホテル業界のほうなんかとも情報は結構持ってるということもあって、今民泊をやろうとしています。

民泊の一つの目的というのは、ミドルステイ、ロングステイ、季節移住も含んで1カ月単位、それから3カ月単位、半年単位、あるいは状況によっては1年いられたいとおっしゃれば1年いられるようなということで、今、自宅は栄町ニュータウンにあるんですけども、もともとは2世帯だったものが祖父母が亡くなりまして、今父親が一人で住んでる。88歳なので、今、介護がちょっとずつ必要になってきてるということで、私は夫が亡くなりまして、子どもたちも独立したこともあります、そして、こちらのほうに戻ってきたという状況がありますね。高齢者、高齢者といつても65歳以上ですけれども、比較的前期の高齢者の方たちというのは時間もあり、お金もありということで、今まで自分が体験したことがなかったことを自分たちのためにお金を掛けようとしてるんですね。観光庁のほ

うの財团の一つでロングステイ財團というのがあります。そちらの会の方の理事さんとちょっといろいろお話をしているんですけども、実はロングステイを希望される方、北海道でしたいという方が結構いらっしゃるんです、実は。

そういう方たちをターゲットに、今、民泊をやろうと思っているところなんですね。もちろんほかにも外国の方々も受け入れましょう。先日サフィールホテルのほうでインバウンドのお話があつて行ってきたんですけども、そういった海外の方たちもこちらのほうでロングステイしたいという方が結構いらっしゃる。あるいは、若い方々ですと、働きながらその場で住むインターフィットみたいの含めてやりたいという希望に変える方もいらっしゃる。東南アジアを含め、ヨーロッパとか、あとアメリカなんかにもいらっしゃるのも事実なんですね。そういった方の受け入れ先としてということを考えています。私が一番力を入れていた、前面出てやっていた高齢者の方々なんですけれども、親がこちらでしばらくいるとすると、おそらく時期的、季節的に見ても冬は難しい。ですから、夏涼しさ、向こうは40度とかありますからね。涼しいところで暮らしたいということ、別荘代わりということで使っていただければいいかなと思っているんですけども、そうすると、おじいちゃん、おばあちゃんがこちらにいるということは、若い方たち孫を連れて親子で来たりとかっていうこともあるわけですよね。そうすると、やっぱりその若い方たちにも稚内を知っていただくことができる。おじいちゃん、おばあちゃんとの暮らし、夏休み1ヶ月一緒に住むということも可能になりますので、そういったことで利用していただければなと思っています。その中で若い、子どもの内にそういった地方での生活を知るということは、将来的にどれぐらいかかるか分かりませんけれども、稚内に住んでみたいなんて、そういう希望を持つ。子どもたちにそういう体験をさせてあげることも私は可能じゃないかなとちょっと考えています。ロングステイ財團にいらっしゃる方たちというのは、ターゲット層としては、もう富裕層が多いんですね。自分で会社を持ってたりとか、そういう人たちが稚内を知つてもらうことによって、少なくとも会社を持っていますので、こちらのほうに例えば支店を出してみようかとか、そういう企業の誘致、規模は大なり小なりありますけど、そういったことも考えていただければいいなということで、私は民泊をしながら地元のネットワークを駆使して、そういう情報もできれば伝えてあげられたらなと思っています。今ちょっと税理士さんとか、それから建設会社であったりとか、そういう同級生たちがこちらのほうにいて、実は猿払の村長さん同級生なんです。そういうこともあって、ネットワークを活用してそういう方々、稚内で短期でも長期でもいらしていったときに、ネットワークを持って情報を配信していく、人と人を結び付けていくっていうことができたら、また面白いかななんて考えていて、今日のお話は、基本的には長期でこちらのほうにずっと住んでいただくということがメインなので、ちょっと話すのを控えていたんですけども、ちょっと私のアイデアも出してみたいかなと思ってお話しさせていただいたところです。

あともう一つ、ちょっと個人的にこれ今一人でしかやってないんですけども、実は坂の下の海水浴場のごみ拾いをしています。今、日本国内でビーチクリーンのツーリズムっていうのが始まっているんです。いろんなところに旅行に行って、海水浴場とか、要するに海をきれいにしよう。プラスチックごみの回収であったりとか、そういうのをみんなでできないかなというのがあつて、全国から稚

内の海岸を中心に知つてもらつて、そういういた情報を持ち帰つてもらう。団体がありますので、そういういろんなところでのビーチクリーンをやっている人たちが来ていただいて、みんなで活動してもらつていう拠点の一つにできないかなということで、今ちょっと考えて動いています。ありがとうございます。

浅川

僕は、二地域居住をしようと思って、最初はいわゆるコンドミニアムみたいな、家電家具付きみたいなところがないかなと調べたら、ないので、一軒家を借りています。このことが分かったので、このコンセプトとしては移住支援型というもので、ホテルと賃貸アパートの中間的なものをつくりたかったというところです。そういうのはないということがよくわかつっていましたので。先ほど見ていただきましたけれども、身一つで来てもキッチンも調理器具もありますし、洗濯機もシャワーもあるので、暮らせるというようなをつくりたかった。

なぜなら、それがないからということと、あとロングステイの話が出てきたんですけど、最近ちょっとTwitterで見付けたんですけど、アドレスホッパーという方々などもいるそうで、特定のところに住まずに、こういう安いシェアハウスとかに3ヶ月住んで、また次のところに行ってとかで、ウェブとかの仕事をしながら、そういう居住形態が実際にあるらしいのです。

まだ深谷さんもおっしゃるとおり、完全にこちらに移住するっていうのも重要なわけですけれど、とにかく一定期間こちらで何らかの形で過ごしてもらう。過ごすと、当然消費はしますので、地元にお金も落ちますので、そういう形のいろんなレベル設定ですよね。私みたいな二拠点居住でもいいですし、1ヶ月いてもいいし、夏場だけでもいいですし、という形のいろんな形の受け皿が必要ではないか。ところが、特に中長期のための宿泊施設がないというので、そういうところをつくっていくことで、二地域居住だったり、アドレスホッパーの方々の受け皿を作つてみたつもりです。

司会

そろそろ時間となつてきました。移住者と言っても、完全移住者なのか、二地域移住者なのか、あるいは仕事の関係で一定期間だけ在住する方もいると思うんですけども、さまざまな形態で移住されている方が増えているように思います。できるのであれば、長らく、かつその地域の人たちとの関係性をうまく構築しながら、そこに住んでいただくことが、地域社会の維持や活性化についてこれから非常に重要になってくるんだろうなと思います。

私も考えてみると、道北地域の移住者だったわけです。私は、仕事の関係でこちらに来たわけですが、住んでみると非常によかったなと思いますし、札幌に行くと正直、名寄に住んでいるときのほうがよかったです、生活上はですね、思うこと結構多いです。そういう意味で、この道北地域に住むことの魅力をいろんな方に知つていただいて、多くの方が訪れ、訪れて交流していけるような地域になっていければと考えております。

この道北の地域振興を考える研究会は、毎年1回、『北海道北部の地域振興』というタイトルで毎年

1号、会誌を出しておりまして、こういったセミナーや講演会の内容を掲載しております。本日のセミナーもスライド資料も含めて、会誌に掲載する予定になっています。さらには、ネット上で本誌を公開しますので、ご友人の方で今日は来られなかつたという方がいたら、ぜひ今日の内容を共有していただければと思います。

今日のセミナーの開催に当たりまして、特に浅川先生はじめ、管理人の村木さん、キックスタート！の皆さんに非常にお世話になって、会場もご提供いただきまして非常に感謝しております。最後に、その皆さんにお礼を申し上げて、このセミナーを終了させていただきたいと思います。どうも今日は、ありがとうございました。

(6) 国道40号音威子府バイパス工事現場見学報告

清水池 義治（会長）

2019年度セミナーの翌日、10月21日（月）に国道40号音威子府バイパス工事現場の見学会を実施しましたので、報告します。会員4名、非会員1名の合計5名が参加しました。

国道40号音威子府バイパスは、音威子府村字音威子府と中川町字誉を繋ぐ、総延長19kmの工事区間となります。区間の大半がトンネルとなっています。この区間の現行の国道40号は、天塩川と山地が迫る狭隘部で、道路幅は狭く、カーブも多い難所です。特に冬季の通行は危険と隣り合わせで、このバイパスの完成は地元の悲願となっています。工事は平成19（2007）年度から開始されました。

当日は13時に音威子府道の駅に集合、工事現場に移動し、担当者から詳細な説明をいただきました。（トンネル内は撮影ができないため、それ以外の場所の画像のみ掲載しています）。トンネル掘削を難しくしている蛇紋岩の説明を受けつつ、二重三重の安全対策を行って工事が行われていることを確認しました。あと少しで貫通というところまで工事が進んでいるとのことで、完成が待ち遠しく感じました。

お忙しいところ、ご対応いただきました旭川開発建設部道路計画課、同・士別道路事務所の皆さんに感謝申し上げます。



『道北の地域振興を考える研究会』は、（一社）北海道開発技術センター、（一財）北海道河川財団、（一財）石狩川振興財団（順不同）による事業費支援を受け活動しています。また本研究会の事業運営に当たっては、名寄市立大学および名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターと連携して活動しています。

<道北の地域振興を考える研究会>

事務局 今野 聖士

〒096-8641 名寄市西4条北8丁目

名寄市立大学保健福祉学部

Tel. 01654-2-4199 *1210

Fax. 01654-3-3354 (代)

E-mail : m-konno@nayoro.ac.jp